
アイドル探偵 秋月涼 名探偵コナン&アイドルマスターD S 秋月涼

あきらたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドル探偵 秋月涼 名探偵コナン&アイドルマスターDS
秋月涼

【Nコード】

N86400

【作者名】

あきらたろう

【あらすじ】

アイドルマスターの「秋月涼」と「名探偵コナン」のクロスオーバーです。

STAGE・1 ドラマの仕事

私の名前は「秋月涼」あきづきりょう 芸能事務所876プロダクション所属の「女性アイドル」です。

年齢は15歳、誕生日は9月15日、身長162cm、体重54kg、血液型はO型、B・W・Hは80/59/80、趣味は掃除とかお料理とかです。

自分で言うのも何だけど女性アイドルとして、今大人気！子供からお年寄りまで幅広いファンがいます。

同世代の男性ファンからは「恋人にしたいアイドル」とか「妹にしたいアイドル」と呼ばれていて、お年寄りの男性ファンからは「孫娘にしたいアイドル」と呼ばれています。

でも、私はそんなファンの皆さんを偽っています。仲間も、自分も偽っています。今はそうするしかないけれど、このままでいいのか、まだ、分からない。

私は……僕は――

ある日、僕は876プロ社長の石川実さんに呼ばれた。僕が主役のドラマの話が来ているとの事だった。

僕はドラマの仕事では「可愛い女の子」の役を演じる事が多い。ドラマの仕事は好きだけど、そういう仕事ばかりなのに少し僕はうんざりしていた。

僕の不満が顔に出たのか、社長は少し笑った。

「涼。この仕事は、あなたのお待ちかねの男の子役よ」

「本当ですか!？」

僕は嬉しくなつて、満面の笑顔を社長に向けた。

そう。僕、秋月涼は本当は男の子だ。男の僕が「女の子」としてアイドルをしているのは理由がある。

僕は小さい頃から、よく女の子と間違われていた。男らしく努力しても、その甲斐は無かった。高校生になった今でも女装しているわけでもないのに、女の子に間違われる。

それどころか、僕が男性だと知っている同じ学校の男子生徒から「付き合ってくれ」とか「結婚してくれ」と言われる始末。

もちろん。僕に、そっちのケは無い。

それで僕は「アイドルになって格好良くなれば、僕も男らしく変われるかも」と思った。

いろいろあつて876プロからアイドルとしてデビューする事になったのだが……

僕の希望に反して「女性アイドル」としてだった。

社長には「今のあなたには、男としての魅力が、これっぽっちもな

いもの」と言われた。ただし「ある条件をクリアできたら、男性アイドルとしてデビューさせてもいいわ」とも言われて、その条件が……「まずは女性アイドルとして成功を収める」事だった。

社長は言った。

「男女問わずアイドルとして成功できる要素は『輝ける』という『才能』！！まずは女性アイドルとして成功を収めて、その『才能』を持っているという事を私に見せてちょうだい」

僕は、その条件を受け入れて「女性アイドル」として活動してきた。

ドラマの仕事で「男の子役」が来るという事は、社長は僕の「男性アイドルデビュー」を認めてくれたのだと思い。この時は喜んだ。

「喜んで、この仕事受けます！」

「じゃあ。引き受けた事、テレビ局に連絡しておくわね。台本渡しておくから、家に帰ったら読みなさい」

社長の言葉に従って、僕は家に帰ってからドラマの台本を読んだ。

「ぎゃおおおん！！」

これは僕が精神的ショックを受けた時の口癖の叫び声だ。叫び声を上げたのには、もちろん理由がある。

ドラマのタイトルは「アイドル探偵秋月涼」だ。僕が女性アイドル「秋月涼」本人としてドラマの主役を演じる。それと僕が一人二役をする事になり、もう一つの役が「秋月涼太」あきづきりょうたという男の子の役だ。

「秋月涼太」は男子高校生で探偵事務所で助手としてアルバイトをしている。女性アイドル「秋月涼」を狙うストーカーの事件が発生し、ボディガードの依頼を探偵事務所は受ける。「秋月涼太」は女装するとたまに「秋月涼」ソックリだったため影武者として芸能界に潜入するのであった。

つまり、僕は女性アイドルとしての「秋月涼」を演じると同時に、探偵事務所でアルバイトをしている男子高校生「秋月涼太」も演じるのだ。

「秋月涼太」という男の子役ができるのは嬉しいけど、「秋月涼太」は女装する役なのだ。

「社長！話が違うじゃ、ないですか・・・」

次の日、事務所に行った僕は早速社長に抗議した。

「あら？何が、話が違うの？」

社長は平然としていた。

「だって、僕の『男性アイドルデビュー』を認めてくれる話じゃなかったんですか？」

「ドラマで『男の子役』の話が来ているとは言ったけど、『男性アイドルデビュー』を認める」なんて言っていないわよ

ここで僕は、また社長に罠にはめられたことに気がついた。僕が嫌がりそうな仕事には僕が断れないような状況にするのだ。

社長は、すでにテレビ局に僕が仕事を受けたことを連絡していて、もうドラマは製作に入っているの、今さら僕が断ったら多大な迷惑がかかることを話した。

「分かりました。この仕事やります」

僕には強引な女性には流されてしまう所がある。自覚はしていて直していかなきやならないとは思っているんだけど上手く行かない。

「でも本当は男の僕が女装して『女性アイドル』やっているのに、さらに男装して『男の子役』やるなんて、分けわかりませんよ！」

僕の抗議に社長は微笑んだ。

「あら？『女性アイドル秋月涼』がドラマで男装することが話題になっっているわよ？」

「ますます。分けがわかりませんよ！」

僕は覚悟を決めて、ドラマの仕事のために台本を熟読することにした。

「あれ？社長。『秋月涼太』がバイトする探偵事務所は本当にある探偵事務所でロケするんですね」

「そうよ。あの有名な『眠りの小五郎』の毛利探偵事務所でロケするのよ。しかも、毛利探偵自身が『秋月涼太』の上司の探偵事務所所長としてゲスト出演するわ」

「毛利探偵に会えるんですか？それは凄いですね」

特に犯罪のニュースに興味の無い僕も毛利小五郎は知っていた。数々の難事件を解決し、推理を語る時、顔をうつむいて話すので眠っているように見えることから「眠りの小五郎」との異名がある。僕がテレビで見た毛利探偵の外見は男らしくて僕がそうなりたいと憧れる男の姿だった。

「毛利探偵に会えるのか、楽しみだな――」

この時、僕は知らなかった。毛利探偵事務所で不思議な少年と少女に出会い。ドラマの撮影中に本当に起きた事件に巻き込まれることを……

僕の名前は「江戸川コナン」帝丹小学校一年生です。

両親の仕事の都合により、今は「毛利探偵事務所」に預けられている。所長の「毛利小五郎」の高校生の娘「毛利蘭」が主に僕の面倒を見てくれている。僕は「蘭姉ちゃん」と呼んでいて、「蘭姉ちゃん」も僕を弟のように可愛がっている。

小学校ではクラスの友達と「少年探偵団」を結成していて数々の事件を解決している。

みんな「江戸川コナン」のことを「家族」として「友達」として好きでいてくれる。

でも、僕はみんなに偽りの姿しか見せていない。僕は……俺は――

日曜日の朝早くから、毛利探偵事務所に少年探偵団の全員が集まっていた。少年探偵団のメンバーは俺「江戸川コナン」を含めて全部で五人。男子三名。女子二名だ。男子の名前は「小嶋元太」「円谷光彦」。女子は「灰原哀」「吉田歩美」だ。

今日、みんなが集まった目的は、ここにドラマのロケのために来る女性アイドル「秋月涼」だ。

「涼ちゃんは料理が趣味なんだろう？俺のためにウナ重つくってこないかな？」

これは元太だ。相変わらずウナ重のことで頭が一杯のようだ。

「あたしは涼ちゃんのこと初めて生で見れるのが、楽しみだな――あたしも高校生になったら、涼ちゃんみたいに可愛くなりたい」

これは歩美ちゃんだ。女の子らしく、そういうことに興味があるようだ。

「歩美ちゃんは、今でも十分可愛いですよ」

これは光彦だ。光彦が歩美ちゃんのことを好きなのは、はたから見ているハッキリしている。

「あら？わたしは可愛くないのかしら？」

灰原の少しからかうような言葉に、光彦は慌てて灰原に顔を向けた。

「灰原さんは、可愛いと言うより綺麗ですよ」

「ありがとう」

灰原は少し気の無いお礼の言葉を言った。

光彦は幼なじみの歩美が昔から好きだったが、最近転校して来た灰原のことも気になっている。こう言つと光彦が気の多い男のようだが、本人も自分の気持ちに戸惑つて悩んでいる。

「ねえ？哀ちゃん。コナンくん。涼ちゃんに会えるの二人とも楽しみでしょう？」

歩美ちゃんが無邪気に尋ねて来た。

俺と灰原は生返事をした。

正直に言つと「秋月涼」に俺はあまり興味は無い。テレビでチラッと見たことはあり、大人気の女性アイドルだとは知っている。灰原も俺と似たようなものだろう。

蘭の話では、蘭の通っている帝丹高校の男子生徒の休み時間の話題は「秋月涼」のことがほとんどだそうだ。

俺も本来の姿で帝丹高校に通っていたら、男子の話の輪に混じつて「秋月涼」を話題にしていたのだろうか？

そう。俺の本当の姿は17歳の高校生だ。本名は「工藤新一」。日本警察の救世主とまで言われた有名な高校生探偵だった。

しかし、ある謎の犯罪組織の作った薬により体が幼児化した。犯罪組織から身を隠すため俺は幼児化した体を利用して「江戸川コナン」

という偽名を名乗り小学一年生として生活している。

幼なじみの「毛利蘭」の父親「毛利小五郎」がやっている「毛利探偵事務所」で生活することにしたのは、犯罪組織の情報を入手するには都合が良いと考えたからだ。

しかし毛利小五郎はへボ探偵なので、俺が密かに手助けをしている。毛利探偵が推理を語る時、うつむいて眠っているように見えることから「眠りの小五郎」と呼ばれているが、実は本当に眠っているのだ。俺が麻酔針で毛利探偵を眠らせ、変声機で毛利探偵の声を出している。

そうして俺は「江戸川コナン」として表に出ずに数々の事件を解決してきた。

「工藤くん。今日は事件を呼ばないでよ」

灰原が他のみんなには聞こえない小声で俺に話しかけてきた。

灰原が俺の本当の名前「工藤」を口にした。彼女は俺の正体を知っている。それどころか俺と同じ境遇にある。

彼女の本名は「宮野志保」年齢は18歳。俺と同じ薬により体が幼児化した。彼女は謎の犯罪組織の一員で薬の開発者だ。しかし組織により、たった一人の肉親である姉を殺されたことから組織を抜けた。彼女も組織の追っ手から逃れるために小学一年生として帝丹小学校に通っている。

「灰原。俺が事件を呼んでいるわけじゃない」

灰原はからかうような笑顔を俺に向けた。

「とにかく。歩美さんは秋月涼の大ファンなんだから、問題は起こさないでね」

俺は灰原に反論しようとした。

「おっ！来たみたいだぜ」

窓から外を見ていた元太の声がしたので、反論を止めて俺は窓に近づいた。

探偵事務所の前の道路に停車している車からテレビで見覚えのある姿が降りてきた。

この時、まだ俺は知らなかった。「秋月涼」と協力して事件の捜査をすることになることを……

STAGE・i ドラマの仕事（後書き）

ご感想をお待ちしています。

STAGE・2 出会い

僕は「毛利探偵事務所」の建物の前で車から降りた。

僕の名前は「秋月涼」男だけど理由があつて「女性アイドル」やつています。

今日は、毛利探偵事務所ドラマのロケがある。撮影開始予定時刻まで、かなり時間はあり、スタッフもまだ来ていないけれども、ひと足早く僕は撮影現場に来ていた。

理由は「毛利探偵」に早く会いたいからだ。僕には「男らしく格好よくになりたい」という目標がある。テレビで見たことのある毛利探偵の姿は僕の理想だった。

僕は、毛利探偵に会える期待で胸を一杯にしてドアの前に立った。

「おはようございます。秋月涼です。今日は、よろしく願いします」

ドアの前で声をかけると、中から複数の人間の声が聞こえた。

「涼ちゃんだ！涼ちゃんが来たよ！わーっ！緊張するなー」

「気持ちは分かりますが、落ち着いてください。歩美ちゃん」

「お土産にウナ重持ってきてないかな？」

僕のファンらしい小学生低学年くらいの子供たちの声がする。僕は

子供向けの「優しいお姉さん」の表情をつくった。こういうことをするたびに、僕の本来の目標から遠ざかる気がするので本当は嫌なのだが、ファンの期待を裏切るわけにはいかない。

「元太。秋月さんに、食べ物ねだるようなことするなよ」

「吉田さんも、秋月さんはお仕事できているのだから、迷惑をかけるないようにね」

今度は、中学生ぐらいらしい男女の声がした。そして中からドアが開いた。

開いたドアの中には、おかつぱ頭にカチューシャをした可愛い女の子がいた。

「はじめまして、涼ちゃん。あたし吉田歩美といいます。帝丹小学校一年生です」

吉田歩美と名乗った女の子は目を輝かせて、僕に挨拶をした。

「僕の名前は、円谷光彦です」

顔にソバカスが目立つ男の子が自己紹介をした。

「俺は、小嶋元太だぜ」

太った男の子が自己紹介をした。

「初めまして、秋月涼です。三人とも同じ小学校の同級生なのかな？」

「おう。そうだぜ」

小嶋くんが答えると、それに対して少し呆れたような女性の声が出た。

「小嶋くん。相変わらず。初対面の人への言葉づかいが悪いわね。もう少し丁寧な言葉をつかいなさい」

その声を発したのは、赤みがかかった茶髪の少女だった。

その少女の姿を見た僕は、とまどった。なぜなら、ドアの外から声だけを聞いた時は中学生ぐらいだと思った声だったからだ。けれども、その姿は他の子供たちと同じ小学生一年生にしか見えない。

「自己紹介が遅れたわね。わたしの名前は灰原哀。帝丹小学校一年生よ」

吉田歩美が「可愛い女の子」ならば、灰原哀は「美人」だった。小学一年生の女の子に対して「美少女」ではなく「美人」と言うのは変だけど僕は、そう感じた。

僕は本当は男の子だけど、周りを偽って女の子アイドルをしているように、彼女は、本当は大人の女性なのに周りを偽って小学一年生をやっているように僕は感じたのだ。

「初めまして、秋月さん。僕の名前は江戸川コナンです。みんなと同じ帝丹小学校一年生です」

江戸川コナンと名乗るメガネをかけた男の子の子供らしい声を聞いた。

て、ますます僕のとまどいは大きくなった。

江戸川コナンの声も僕が中学生ぐらいだと思った声だった。自己紹介の声は小学一年生らしい声だったけども、僕は不自然さを感じた。僕は女装している時は、その姿に合わせて『女性』を演じている。江戸川コナンも本当は大人の男性なのに、その姿に合わせて『子供』を演じているように感じた。

（何を僕は変なこと、考えているんだ。そんなことあるわけないだろう）

この時は、江戸川コナンと灰原哀に僕が感じた違和感は、それではなかった。

私の名前は「灰原哀」小学一年生。もちろん。その名前と年齢は偽りで、本名は「宮野志保」18歳だ。

私は友達と一緒に人気女性アイドル「秋月涼」に会いに来ている。正直に言うと、わたし自身は秋月涼には特に興味は無い。私の親友である「吉田歩美」が大ファンのため付き合いで来ている。

そう。「親友」吉田さんは私が初めて得た親友だ。それだけに、私が彼女に偽りの姿しか見せていないことに心が痛む。彼女は初めは「灰原さん」と、私を呼んでいたのが、友達として「哀ちゃん」に変わった。その時は、私は口にも態度にも出さなかったが、嬉しかった。

「君たちは、毛利探偵と、どういう関係なの？」

秋月さんがたずねた。

「俺たちは少年探偵団だぜ。この小嶋元太が団長だ」

「じゃあ。君たちは毛利探偵とは、シャーロック・ホームズとベーカー・ストリート・イレギュラーズみたいな関係なんだ？」

秋月さんの言葉に、私の隣にいる推理マニアさんが、嬉しそうに目を輝かせた。

「秋月さんは、シャーロック・ホームズ読んだことあるの？」

「もちろん。小学生の頃、学校の図書館で借りてね。男の子なら一度は、シャーロック・ホームズに憧れて、あんな風になりたいと思うよ」

私も含めて、みんなが怪訝な顔になった。今の秋月さんの言葉は、彼女が「男の子」という意味になるからだ。

みんなの怪訝な顔に気づいたのだろう。秋月さんは慌てた顔になった。

「ごめん。ごめん。言い間違えた。女の子なら、あんな風にカッコイイ男に憧れるって言いたかったの」

私を含めて、みんなは納得した顔になった。

工藤くんは、自分が両親が海外に仕事に行っており、毛利探偵事務所に預けられていることを話した。自分たち少年探偵団は、毛利探

偵とは直接関係は無く、独自にいくつも事件を解決していることも話した。

「へえ。君たち少年探偵団は、本当に事件を解決したことがあるんだ。それは凄いね」

秋月さんは信じてはいないが、子どもを傷つけないように注意した声で相槌を打った。

それは、そうだろう。小学一年生が本当に事件を解決したなど、信じる方がどうかしている。

その後、しばらく工藤さんと秋月さんは、ホームズの話で盛り上がった。

「ねえ。ねえ。哀ちゃん」

吉田さんが、他の人には聞こえないように小声で私に耳打ちした。

「コナンくと涼ちゃん。大丈夫かなあ？」

「大丈夫って、何が？」

「もう。哀ちゃん。鈍いなあ。コナンくと涼ちゃんが、お付き合いしたりしないかってことなの」

私は呆れた表情になった。

「あつ。哀ちゃん。あり得ないって思ったわね？油断しちゃ、ダメなの！芸能界じゃ、コナンくと涼ちゃんぐらいの歳の差の夫婦や

カップルなんて、珍しくないんだからね！」

吉田さんに、そう言われて、工藤さんと秋月さんの会話の様子をあらためて見た。

「大丈夫よ。吉田さん」

「何が？大丈夫なの？」

「二人の様子をよく見てみて、仲の良い男の子同士が話しているという感じでしよう？あれじゃあ。吉田さんが心配したような関係には、なりようがないわ」

吉田さんは、二人を見た。

「本当だ。哀ちゃんの言う通りだ。涼ちゃんテレビで見た時は『お姉さん』って感じたけど、今は『お兄さん』みたく見える。あつ！哀ちゃん。あたしが涼ちゃんのこと『お兄さん』って言ったこと悪いから秘密ね」

私と吉田さんの会話を知ることもなく、工藤くんたちはホームズの話で盛り上がっている。

「秋月さんが、こんなにホームズに詳しいなんて意外だったなあ」

「今回のドラマの仕事の参考になるかと思って、読み返したからねあれ？そういえば、毛利探偵は、どこにいるの？」

「出かけてるよ」

「やっぱり。何かの事件の調査とか？」

「まあ。そんなところ」

工藤くんは誤魔化したが、私は真相を知っている。毛利小五郎は昨日の夜から徹夜で飲みに行つて、今日は朝早くからパチンコに行っている。

「やっぱり。毛利探偵つて、テレビで見るように格好良いんでしょ？ あんな男らしい姿には憧れちゃうなあ」

どうやら、秋月さんは毛利小五郎に本気で憧れているらしい。確かにニユースなどで報道される毛利小五郎は結構格好良く見える。

日頃のダメ探偵ぶりを知っている私たちは目を見合わせた。

できるなら、秋月さんを失望させないためにも、そのような醜態を毛利小五郎は見せないように、私は願った。

「おーい。毛利探偵事務所の所長さまのお帰りだぞー」

私の願いとは裏腹に、毛利探偵の昨夜の酒が残っている声がドアから聞こえた。

事務所の中に入って来て、その姿が私たちの視界に入った。

昨晚の酒が残っているらしく顔は赤いし、無精髭を生やしたままで、さらにパチンコの景品の入った袋を抱えている。

典型的なダメな大人の男の姿だ。

その姿を見た秋月さんが、失望しているのではないかと、他人事ながら心配になった。

秋月さんは、目を輝かせていた。

「さすがです！毛利探偵！」

秋月さんは感動で身を震わせていた。

「どういう。ことなの？」

私は思わず秋月さんに質問した。

「今日の撮影で、毛利探偵が、その姿で事務所に入って来るシーンがあるんです。わざわざ役作りをしてくださるなんて素晴らしいです」

完全な誤解だが、私たちは、それを解くようなことはしなかった。

撮影まで、まだ時間があるので毛利探偵は、少し寝ると言って奥の方に行った。

撮影スタッフや他の俳優もまだ誰も来ていない。

「腹減ったなあ。何か食うもん。ないか？」

小嶋くんが、おなじみのセリフを口に出した。

「よかったら、これをどうぞ。毛利探偵にプレゼントしようと思っ

て、持って来たんだけど……」

「やったあ！ありがとう。秋月姉ちゃん！」

小嶋くんは秋月さんが出した箱を開けた。

中には、手作りらしいお菓子が入っていた。

「少年探偵団のみなさんも、遠慮せずに、食べて！」

私たちは、お菓子を手に取って食べた。

とてもおいしかった。

しばらく、私たちは秋月さんと楽しい時間を過ごした。

この後「ごく小さな事件」が起きるとも知らずに……

STAGE・2 出会い（後書き）

ご感想をお待ちしています。

STAGE・3 ごく小さな事件

少年探偵団のみんなは、僕、秋月涼の手作りのお菓子「クッキー」をおいしそうに食べている。

僕は愛ちゃんから今朝貰った「御守り」をバックの奥から取り出して、見つめた。

愛ちゃんというのは、876プロに僕と同期で入った日高愛ちゃんのことだ。

今朝、僕が876プロの事務所行った時のことだった。

「おはようございます！涼さん！」

愛ちゃんが、いつものように元気一杯の大きな声で僕に挨拶をした。

「おはようございます……？涼さん」

水谷絵里ちゃんも、いつものようにどこか自信無いような声で僕に挨拶をした。

愛ちゃんも絵里ちゃんも事務所同期の女性アイドルだ。

僕は15歳で、絵里ちゃんは同い年、愛ちゃんは13歳だ。

彼女たちは、僕が本当は「男の子」であることは知らない。

以前、仕事で一緒に温泉に行った時には、僕の前で平気で服を脱いで裸になったので、目のやり場に困ったことがある。

彼女たちは僕を「女性」だと疑うことなく仲間だと思っている。僕は彼女たちを騙していることに罪悪感を持つているし、僕が本当は「男性」だと知ったら彼女たちが、どんな反応をするのか怖くもある。

僕が、そんなことを考えているのも知らずに、絵里ちゃんが僕に声をかけてきた。

「涼さん。これ……」

絵里ちゃんが僕に書類の束を渡した。

「これは、何？絵里ちゃん」

「ネットで調べた毛利探偵の情報……今日、毛利探偵事務所に口々に涼さん行くから、参考にとまって……」

「ありがとう。絵里ちゃん。大切に読ませてもらうよ」

僕が喜んで絵里ちゃんにお礼を言うと、今度は愛ちゃんが近づいて来た。

「あーっ！そう言えば、今日でしたね！あたしも涼さんに渡したいモノがあるんです！」

「愛ちゃんは、何を私にくれるの？」

「お守りです！涼さんが毛利探偵事務所に行つて、命が危なくなるような目にあつても大丈夫なように、買ってきました！」

「あの……愛ちゃん。私はドラマの撮影に行くだけだから、命の危険なんては……」

「油断しちゃダメですよ！涼さん！」

愛ちゃんは真剣な表情を、僕に向けた。

「数々の難事件を解決してきた有名な毛利探偵事務所に、行くんですよ？昔捕まえた悪い人に仕返しに襲われたり、世界征服を企む悪の秘密結社の陰謀に巻き込まれたり、するかもしれないじゃ、ないですか？」

僕は愛ちゃんの言うことはオーバーだと思ったが、僕を心の底から心配してくれているのは分かった。

「だから、お守りを買ってきたんです。合格祈願と安産祈願と交通安全のお守りです！きっと役に立ちます」

愛ちゃんのお守りの選択はムチャクチャだけど、その気持ちは嬉しかった。

「じゃあ！早速！渡しますね！」

愛ちゃんは自分の服のポケットに手を入れた。

「あれ？」

愛ちゃんは自分の服のポケット全部に手を入れた。

「あれ？あれ？あれ？」

続いて、自分のバックの中の物を全部出した。

愛ちゃんは涙目になった。

「うーっ！すいません！涼さん！家に忘れてきたみたいです！家に帰って、取ってきます！」

僕は慌てて手を振った。

「いいのよ！愛ちゃん！気持ちだけで嬉しいわ。それに愛ちゃんも、これからお仕事でしょう？今から家に帰ったら間に合わないわよ？」

「それじゃあ、あたしの気が済みません！何か……何か……そうだ！」

愛ちゃんはバックの中身を出した物から、一つをつまむと僕に渡した。

それは包装紙に包まれたキャンディーが一つだった。

「涼さん。このキャンディー貸しますね！」

「貸す？私にくれるんじゃないの？」

「必ず！この事務所に、涼さん帰ってきて、あたしにこのキャンディーを返すと約束してください！このキャンディーがお守りの代わ

りです！」

愛ちゃんの心配はやはりオーバーだと思ったが、気持ち嬉しかったので、僕は笑顔でうなづいてキャンディーを受け取った。

「約束する。私は必ず。このキャンディーを返すために、ここに戻って来る」

僕が、その時のことを思い出して手のひらのお守りのキャンディーを見つめていると、突然横から来た手がキャンディーを取っていた。

小嶋くんだった。

「おっ！秋月姉ちゃん。キャンディーもあるじゃんか！これも食べてくれよ！」

小嶋くんがキャンディーの包装紙をむこうとしたので、僕は慌てて手を伸ばして取り返そうとした。

「止めろ！元太！」

「止めなさい！小嶋くん！」

江戸川くんと灰原ちゃんが大声を出した。

驚いて、僕と小嶋くんは動きを止めた。

「何だよ？コナン？灰原？」

突然大声で声をかけられて戸惑っている小嶋くに、江戸川くんは近づいた。

大声を出した時は真剣な表情をしていたが、今は江戸川くんは穏やかな表情をしている。

「いや、ただ、お菓子をご馳走してくれた秋月さんに、お礼に俺のパフォーマンスを見てもらおうと思ってな！」

そう言つて、江戸川くんは小嶋くんの手のキャンディーを手に取ると、それをボール代わりにしてサッカーのリフティングを始めた。

僕はキャンディーが割れてしまうので、慌てて止めようと立ち上がろうとした。

そこに、灰原ちゃんに手を引かれた。

「大丈夫。江戸川くんに任せて」

灰原ちゃんは、僕にだけ聞こえる小声で言った。

灰原ちゃんが江戸川くんのことを見つめる目は、深く信頼している人物に向ける目だった。

その目を見て、何故か僕は安心できた。

座つて、江戸川くんのパフォーマンスを見物することにした。

「素敵！コナンくん！」

「相変わらず。すごいですね。コナンくんは」

「すげーぞ！コナン」

江戸川くんと灰原ちゃん以外の子供たちが誉めるように、確かにコナンくんは凄かった。

小さなキャンディーを頭と足を使って、上手くりフティングし続けている。

僕はサッカーに興味があるので分かるが、とても普通の小学一年生のできる動きとは思えなかった。

数分後、リフティングを終えた江戸川くんが、僕たちに向けて礼をすると、僕も含めてみんなは拍手をした。

リフティングを終えた江戸川くんに灰原ちゃんは近づいて、何かを受け取った。

灰原ちゃんは僕に顔を向けた。

「秋月さん。お手洗いの場所、案内していなかったわね？こっちよ」

僕は、その言葉に素直に従った。

お手洗いはドアを開けてすぐは洗面台になっている。

灰原ちゃんが先に中に入り僕が中に入ってドアを閉めると、灰原ちゃんが口を開いた。

「これ、大事なモノなんですよ？大丈夫。割れてはいないわ。江戸川くんがリフティングしていたのは、そこら辺にあった紙を丸めてキャンディーのように見せ掛けたモノだから」

灰原ちゃんは、僕が愛ちゃんからお守りとして借りているキャンディーを僕に渡した。

「何故？これが大事なモノだと、分かったの？」

当たり前だが、これはありふれたどこにでも売っているキャンディーだ。

他人が見ても大切なモノだとは思わないだろう。

「簡単よ。私たちにクッキーを食べることすすめた秋月さんが、バツクから取り出したキャンディーを私たちにすすめないし、秋月さん自身が食べるわけでもなく、しばらく見つめていた。その秋月さんの行動から、そのキャンディーは『食べてはいけないモノ』例えば『記念品』ようなモノだと推理したの、当たっているかしら？」

僕は推理が当たっていることに驚きつつ、キャンディーの細かい事情を話した。

「そう。良かったわ。友達とか仲間との約束は守らなきゃ」

僕は灰原ちゃんに……いや、彼女に「ちゃん」と呼ぶのはふさわしくない。

僕は灰原さんに質問した。

「江戸川さんが、そのことを小嶋くんに説明せずにパフォーマンズをすることで、キャンディーを小嶋くんの手から取り上げたのは、小嶋くんを傷つけないためだね？」

灰原さんはうなづいて。

「そうよ。小嶋くんは、ああ見えて精神的にデリケートなところがあるから、秋月さんの大切なキャンディーを自分が食べようとしたのを知ったら罪悪感で傷つくわ。それに吉田さんたちと秋月さんも、なんだかギクシャクしちゃうでしょうし……まあ『ごく小さな事件』だけど、あの探偵さんのおかげで解決できたわ」

僕は灰原さんと江戸川さんが、特に打ち合せをせずに行動していたことを思い出した。

「灰原さんと江戸川さんお互い口にせずに、何を考えているのか分かるなんて、二人はお付き合いしているのかな？」

僕はこの言葉を軽い気持ちで口にしたのを、灰原さんの表情を見て後悔した。

灰原さんは悲しそうに目を伏せた。

「私と彼との関係は、そんな楽しいモノじゃないわ……」

僕は何と言葉を続ければ良いのか分からずにいると、ドラマ撮影のためのスタッフが事務所に入って来るのが聞こえた。

僕は灰原さんのことが心残りだったが、撮影の準備に入ることにし

た。

僕は部屋の一つを借りて、ドラマの衣装に着替えている。

今日の撮影では、僕は毛利探偵事務所でアルバイトをしている男子高校生「秋月涼太」をやる。

脚本によると「秋月涼太」が毛利探偵事務所でアルバイトをするこ
とになった動機は「探偵になって格好良くなって男らしく変わりたい」
となっている。

「秋月涼太」は小さい頃からよく女の子に間違えられていて、最近
は男だと知っている学校の男子生徒から愛の告白を受ける始末。

その状況を変えようと、毛利探偵事務所でアルバイトをしている。

……どこかで聞いたような話だけど、この脚本書いた人、僕の正体
知ってるんじゃないだろうか？

「秋月涼太」の衣装は、Ｔシャツにジーンズ、そしてメガネと本来
の僕の姿とほとんど変わらない。

「秋月涼太」はドラマの中では本当の男の子だけど、現実には「女
性アイドル秋月涼」が男装して演じている。だけど「女性アイドル
秋月涼」は、男性の僕が女装している姿で……

ややっこしい状況になっている。

その時、ドアがノックされてドアの外から聞き慣れた女の子の声
がした。

「涼！いるんでしょう？私が共演してあげるんだから、感謝しなさい！」

夢子ちゃん。僕の友達でありライバルでもある桜井夢子の声だった。

STAGE・3 ごく小さな事件（後書き）

ご感想をお待ちしています。

STAGE・4 撮影開始と事件発生

私の名前は桜井夢子。

今日はドラマ「アイドル探偵 秋月涼」の撮影のために毛利探偵事務所に来ている。

まったく涼のクセに生意気よ！私より先にドラマの主役だなんて……でも、まあいいわ、私はこのドラマで脇役として出演するけど、主役の涼を食っちゃうほどの名演技を見せて、将来ドラマの主役をつかむチャンスにするんだから！

それに今日の撮影では、私は秘かに楽しみにしていることがある。

それは、涼が「秋月涼太」という男の子役をするために男装することだ。

涼は、私ほどじゃないけど美少女だ。それが男装なんかしたら、きつと似合わないだろう。

一目見て似合わなかったら、思いっきり笑ってカラかってやろうと思っている。

「涼！もう男装に着替えてるんでしょう？さっさと出て来て！私にその姿を見せなさい」

私が鍵が掛かって閉まってるドア越しに、涼に声をかけた。

「待ってよ！夢子ちゃん。すぐに出ていくから、待っててよ」

中から涼の少し慌てたような声が聞こえた。

そういえば、私と涼はオーディションの時に同じ更衣室で着替えたことが何度かあったけど、涼は一足早く来ていてすでに着替えているか、隅の方でコソコソ着替えているかだった。

女同士なのに裸を見られるのを、恥ずかしがっているようだった。

まあ。そういう女の子は珍しくないけど。

「お待たせ！夢子ちゃん」

涼がドアを開けて部屋から出て来た。

「ふーん。涼。似合ってるじゃない。男装」

私は涼の男装を見て、意外に思った。本当に似合っているのだ。

「本当？夢子ちゃん。僕の男としての姿似合っていると思う？」

何故か涼は嬉しそうに、私に尋ねてきた。

「もちろんよ。女の子に間違われる美少年って感じよ」

「女の子に間違われる美少年……僕は、そこから逃れられないのか……」

私としては誉めたつもりなのに、何故か涼は落ち込んだ。

「ところで、涼。さつきから、あなた自分のこと『僕』って言うてるけど……」

「ああっ！？夢子ちゃん。これは……」

涼は大変なミスをしたように慌てた。

「もう。『秋月涼太』としての演技始めているの？」

「そ、そうなんだよ！夢子ちゃん。『僕』って言うのに慣れておかないとね」

涼は何かを誤魔化すように言った。

男装した涼は本当に「美少年」という感じで、私の悪戯心を刺激した。

「えいつ！」

「わーっ！何するの！？夢子ちゃん！」

私は涼に抱きついた。涼の慌てる顔が本当に男の子みたいで、ますます私の悪戯心を刺激した。

「あら、『涼太くん』は女の子にこういうこと、してもらったことないの？」

「な、ないよー。夢子ちゃん。お願いだから、離して」

顔を真っ赤にしている涼を見て、私はますます楽しくなった。

私は男の子と付き合った経験は無いけど、少し気の弱い美少年をからかっているようで楽しかった。

撮影開始時間まで、私は楽しい時間を過ごした。涼はグツタリとしてたけど。

撮影が開始された。

「毛利所長！何とかしましょうよ！もう1週間何の仕事の依頼も無いんですよ！」

涼が演じている『秋月涼太』のセリフだ。

撮影場所になつてゐる毛利探偵事務所の隅には、見学に来ている小学一年生五人がいた。

詳しい事は聞いてないけど、毛利探偵の関係者らしい。

私が印象が強いのは、メガネをかけた男の子と赤みがかかった茶髪の女の子だ。

なぜなら、他の三人の子どもは、食い入るように熱心にドラマの撮影を見ている。小学一年生ぐらいの年頃にはよくある態度だった。だけど、その二人は撮影を見てはいるが冷静だった。私の経験からすると高校生以上の態度だ。

そこに私は違和感を感じたけど、この時は撮影中だったので、それ以上は考えなかった。

「涼太。俺たちのような探偵が、依頼が無くて暇なのは世の中にとっては良いことなんだ。世の中に探偵に依頼しなければならぬ困っている人がいないということなんだからな」

毛利探偵のセリフだ。

セリフだけを聞くと立派なことを言っているように聞こえるけど、競馬のラジオを聞きながら競馬新聞を片手に缶ビールを飲んでいるのでは、全く説得力が無い。

このドラマでは毛利探偵は「普段はふがないが、決める時は格好良く決める」というキャラクターになっているので、こういう演出になっている。

「でもこのままじゃ、僕のバイト代は大丈夫なんですか？」

「おい！涼太！バイト代目当てで、俺の所で探偵の助手のアルバイトをしているのか？『バイト代は、どんなに安くてもいいから、助手にしてください』と言ったのは、涼太じゃないか？」

「それは、そうですけど……探偵の仕事をすれば男らしく格好良くなれるかと思って、ここでアルバイト始めたのに、肝心の探偵の仕事が全然無いじゃ、ないですか！」

「あのー？こちら毛利探偵事務所ですよ？ノックしても、声をかけても、誰も出てこないから、勝手に入って来ちゃたんですけど……」

これは私『桜井夢子』のセリフだ。ここから私の出番だ。

「そうです。僕が助手の秋月涼太で、こちらが所長の毛利小五郎です。仕事のご依頼でしょうか？」

毛利探偵は慌ててラジオを消して、競馬新聞と缶ビールをしまった。

「そうです。ボディガードを依頼したいんです。こちらの涼の…私の親友の秋月涼のボディガードをです」

私と涼は、一緒に毛利探偵事務所に来ている設定になっている。

もちろん。今、涼は『秋月涼太』をしているから『秋月涼』は後から別に撮影して映像を合成することになっている。

このドラマでは現実そのままの役が多い。涼は女性アイドル『秋月涼』本人を演じるし、私も女性アイドル『桜井夢子』本人を演じる。「あっ！大人気の女性アイドルの秋月涼さんに桜井夢子さんですね！いつもテレビで見えています。お二人は大変仲の良い親友なんですよね？」

「はい。私の大切なお友達の涼が、ストーカーにあっているのでボディガードの依頼に来ました」

涼と私の口から『秋月涼』と『桜井夢子』が親友だというセリフが出ると、もちろん表には出さないが、内心で私はおかしく感じた。

このドラマでは『秋月涼』と『桜井夢子』は親友であるとの設定になっている。

現実でも私と涼は、一緒にいることが多いので周りには『親友』だ

と思われるらしい。

私と涼は『親友』なんかじゃ無いのに……そう言えば、私と涼の関係は何なんだろう？

『ライバル』が一番しつくりくる関係かな？

でも、私は今はしてないけど、昔はライバルには色々嫌がらせをした。

涼にも最初は私は嫌がらせをしたのに、そのことを気にせずに、涼は私に親切に優しくしてくれる……。

でも、涼は誰にでも親切だし優しい。

涼にとって私は『誰にでも』の一人で『特別』じゃ、ないのかな？

な！なにを考えているのよ！？私は！

これじゃあ。私が涼の『特別』になりたがっているみたじゃない！

私は頭の隅で、こんなことを考えていたがドラマの撮影は順調に進んだ。

「あれ？」

私は何かに気づいて『秋月涼太』に近づいた。

「な？何ですか？桜井さん」

私は『涼太』の顔のメガネをはずした。

「わっ！やっぱり。ソックリね！涼太くん」

「ソックリで、誰にですか？桜井さん」

「もちろん。涼とよ。涼太くんは名前だけじゃなくて、顔もソックリなのよ！涼！涼太くんの隣に並んでみて！」

ここで『秋月涼太』と『秋月涼』は並んでいることになっている。もちろん。『秋月涼』は後から撮影して合成する。

「ほう。確かに、涼太。お前と涼さんは顔はソックリだし、背の高さもほとんど同じだな」

毛利探偵は、良い考えを思いついた表情になった。

「そうだ！涼太！お前、涼さんに変装して、涼さんの影武者になれ！そうすればストーカーの目は変装した涼太の方に行くから、涼さんは安全だ！」

「えーっ！毛利所長！それは男の僕に女装しろってことですか？嫌ですよ！男らしくなりたいから、探偵事務所でバイトしているのに！」

「いいからやれ！これは所長命令だ！命令に従わなければ首だぞ！」

「そんなー！」

ここで撮影は一旦中断になった。

次は『秋月涼太』が女装して『秋月涼』に変装するシーンの撮影だ。
このシーンの演技は、涼にとって難しいものになるはずだ。

なぜなら、男の子の『秋月涼太』が女装して『秋月涼』の演技をし
なければならないからだ。

涼にとって現実の『秋月涼』として演技をすれば良いようだが、そ
うでは無い。

この場合は、男の子が女装して恥ずかしがっている演技しなければ
ならないのだ。

涼にとっては、男の子としての演技するよりも難しいだろう。

涼が女の子の衣裳に着替えてきて、撮影は再開された。

「やっぱり。予想通りね。女の子の衣裳が、よく似合っわよ。涼太
くん」

「そんなにじっくり見ないでください。桜井さん」

涼は初めてスカートを履いたように、体をもぞもぞさせて顔を赤く
している。

涼は、凄い演技力だ。

そこにナイフを手に持った柄の悪そうな男が、事務所に飛び込んで
来た。

「毛利小五郎！俺のことを忘れたとは言わせないぞ！」

毛利探偵は柄の悪い男に答えた。

「俺が以前罪を暴いて刑務所送りにしてやった奴だな。もう、刑務所から出て来たのか？」

「ああ。模範囚としてふるまったので、刑期が短縮されてな。それも、毛利小五郎！こうして貴様に復讐するためだ」

「愚かなことを……相手になってやる。かかって来い！」

もちろん。これもドラマの一部だ。脚本ではナイフで襲い掛かった男を、毛利探偵が柔道技で投げ飛ばすことになっている。

しかし、男は私に向かって来た。

私何が起きたのか分からず動けないでいると、男に向けてサッカーボールが飛んで来た。

男の顔に当たり男が床に倒れると、男はいきなり眠った。

「何？何なの！？」

見学していた小学一年生のメガネの男の子が男の手のナイフを拾った。

「桜井さん。このナイフ、本物だよ。この男は桜井さんを本当に襲おうとしたんだ」

私は自分が命の危機にさらされたことに恐怖して、思わずメガネの男の子に、こう尋ねた。

「あなたは何者なの？」

男の子は小学一年生とは思えない表情で、こう言った。

「江戸川コナン。探偵さ」

STAGE・4 撮影開始と事件発生（後書き）

感想をお待ちしています。

STAGE・5 秋月涼と江戸川コナン その1

「江戸川コナン。探偵さ」

俺は桜井さんに、そう言った。

危ないところだった。

俺はギリギリで男が持っているナイフが本物だと気づき、キック力増強シューズでサッカーボールを男の顔を目掛けて蹴り、腕時計型麻酔銃で男を眠らせた。

当然、撮影は中断され、警察が呼ばれて男は逮捕された。

夜のニュースによると、その男は警察の取り調べにあっさりと自白し、桜井夢子の狂信的なファンであり、本来の役者と入れ替わり、犯行におよんだとのことだった。

この時俺は、そのニュースを鵜呑みにして、それ以上深く考えることをしなかった。

だが、これは事件の始まりにすぎなかったことを、俺は後で思い知ることになる……。

僕、秋月涼は自宅の自分の部屋で、絵里ちゃんからもらった毛利小五郎についてのデータを何度も読み返していた。

夢子ちゃんが襲われた事件の現場で見たことが、今でも信じられないからだ。

あの時、あの江戸川コナンという少年は、サッカーボールを蹴って男を倒した。

江戸川さんがサッカーボールを蹴るのを目撃したのが僕だけだったようで、他の人は誰も奇異には思わなかったようだ。

当たり前だが、小学一年生に大人の男を倒すほどのキック力があるわけがない。

それに江戸川さんが、夢子ちゃんに言った「江戸川コナン。探偵さ」という言葉が気になっている。

江戸川さんと灰原さんに最初会ったときに感じたことといい、僕は他人に話したら大笑いされるに違いない考えが、頭の中に生まれている。

「江戸川コナンは本当に探偵なんじゃ、ないか？」

自分でも馬鹿な考えだと思うが、それを検証するために毛利小五郎のデータを何度も読み返している。

毛利小五郎は、かつては警視庁捜査一課の刑事だったが、刑事時代の評価は高くなく、むしろダメ刑事の評価を受けている。

警察を退職後、私立探偵となったが、探偵としてもヘツポ探偵という評価だった。

「眠りの小五郎」と呼ばれる名探偵として活躍するようになったのは、最近のことだ。

奥さんとは別居中で、同居しているのは高校生の娘と、知り合いから預かっている江戸川コナンだ。

毛利小五郎が「眠りの小五郎」として活躍し始めた時期と、江戸川コナンが毛利小五郎のところに預けられた時期は一致している。

「本当に探偵として推理しているのは江戸川コナンで、毛利小五郎は看板にすぎないのではないか？」

その考えに、僕の頭は取り付かれている。

では、それが真実だとしたら「江戸川コナン」は何者なのか？

毛利小五郎の周囲の人間関係のデータを調べている内に、僕は一つの結論にたどり着いた。

その結論を裏付ける情報を得るために、僕は絵里ちゃんにメールを送った。

絵里ちゃんにネットで見つけてくれるように頼んだ情報は、簡単には見つからないらしく、絵里ちゃんからの返事はなかなか来なかった。

その時、僕のケータイに電話が来た。夢子ちゃんからだった。

「夢子ちゃん。私に何の用なの？」

「何よ？涼？用事が無ければ、私はあなたに電話しちゃ、いけないわけ？わざわざ私が忙しいのに涼に電話してあげたんだから、感謝しなさい！」

「うん。もちろん。夢子ちゃんが、私に電話してくれたことは嬉しいよ」

僕は夢子ちゃんの声は、いつものように強がってはいるが、かすかな怯えを感じた。

無理もない。殺されかけた恐怖で、事件の現場となった毛利探偵事務所で夢子ちゃんは、しばらく茫然としていた。

夢子ちゃんと僕は、他愛ない雑談を十分ほど続けた。

夢子ちゃんは誰かと話すことで、怯えから解放されたいようだった。

僕は、それは口には出さずに夢子ちゃんと話を合わせた。

「ねえ……涼。話したいことがあるの、笑わないで聞いてくれる？」

急に夢子ちゃんの声が真剣になった。

「もちろん。笑ったりしないよ。話したいことって、何なの？」

「あの事件から、私……誰かに尾行されたり、監視されているような気がするの」

僕は驚いた。

「そのこと、ご両親や警察に言ったの？」

「ダメよ！親に言ったら『アイドルなんか辞める！』と言われるわ。私の親は私がアイドルになるって言った時に反対して、説得するのに苦労したんだから！今回の事件でも『アイドルなんかやってるから、変質者に狙われるんだ！』って言われたんだもの！私には夢があるの！アイドルは辞めたくないの！」

僕は夢子ちゃんの夢を知っている。

「オールド・ホイッスル」天才プロデューサー武田蒼一が仕切っている日本最高の音楽番組。

それに出演することが、夢子ちゃんの夢だ。

夢子ちゃんが夢に向かって、努力してきたのは知っている。

僕は夢子ちゃんに安心させるように言った。

「大丈夫。夢子ちゃんのこととは必ず守るから」

「涼。あなた一人で何ができるって言うの？」

夢子ちゃんは強がっているけど、助けを求めるような声の響きがあった。

家族にも相談できずに僕に電話をして来たのだらう。

「もちろん。私一人の力では無理よ。でも力になってくれそうな人に心当たりがあるの。その人に相談してみる。夢子ちゃん。明日その人と夢子ちゃんの家に行っていていい？」

「涼が来たいのなら、来なさいよ。お茶ぐらいなら用意してあげるわ。お菓子は涼が持つてきなさい。涼の手作りのクッキーを持つてくるのよ!」

夢子ちゃんとの電話を終えると、ちょうど絵里ちゃんからの返事が来た。

絵里ちゃんがネットで見つけた画像データを見て、僕は「江戸川コナン」の正体について確信を持った。

俺「江戸川コナン」は蘭のつくってくれた朝飯を食べ終えた。

今日は日曜日だ。少年探偵団のみんなとは約束はしてないし、特に予定は無い。

今日は買ったままで、まだ読んでいない推理小説を読んで一日を過ごそうかと思っていた。

「コナンくん。お客さんよ!」

蘭が、お客さんを連れて部屋に入ってきた。

お客さんは、秋月涼さんだった。

「朝早く失礼します。今日はお願いがあって、来たんですけど……」

秋月さんの願いは、ドラマで小学一年生の男の子の姉の役をする

ことになったため、俺に練習相手になって欲しいとのことだった。

秋月さんは一人っ子で兄弟はおらず。「姉」の気持ちが分からないそう。

小学一年生ぐらいの男の子の知り合いは、俺ぐらいなので頼みに来たとのことだった。

「コナンくん。この前、初めて会ったばかりなのに、こんなことお願いするのは、迷惑だったかな？」

秋月さんは、何かにすぐるような優しい笑顔を俺に向けた。

その顔には「理想の妹」を俺は感じた。

俺は今は小学一年生の姿をしているが、実際は17歳。秋月さんは15歳だ。

現実に、こんな可愛い妹がいたら、俺は「兄」として妹に頼まれたら何でもしてしまいそう。

俺が現実にした態度は「兄」としてではなく「小学一年生」としてのモノだったが。

「うん。秋月さん。僕に役に立つことなら、何でもするよ」

「ありがとう。コナンくん。練習場所まで車で一緒に行ってもらえる？」

蘭も一緒に行きたがったが、園子との約束があると言うので、俺と

秋月さんは二人で車で練習場所に向かった。

着いた場所は、普通の戸建ての家だった。

「秋月さん。ここは？」

「ここは、私の自宅。分かっていると思うけど、コナンくん。この場所を他の人に教えたりしないでね。ファンが押し掛けて、大変なことになるから」

「もちろん。分かっているよ。秋月さん」

秋月さんは、俺たちを送ってきた車の運転手に声をかけていた。

「運転手さん。コナンくんが帰る時は、また連絡しますので、よろしく願います」

「かしこまりました。秋月さま」

車は走り去って行った。

「あの車は、秋月さん専用なの？」

「そう。車も運転手さんも事務所が用意してくれたの」

「へえー。さすがはトップアイドルだね」

俺は素直に感心していた。

「そう。私は自分で言うのはなんだけど、トップアイドルなの……」

コナンくんは芸能界にあまり興味が無いみたいだけど、トップアイドルになるのが、どれだけ大変か分かる？」

秋月さんは何故か真剣な表情になって、俺に質問した。

「もちろんだよ。才能だけじゃなくて、努力の積み重が、どんなに大変なのかは分かっているよ」

「そう。大変だった。私はもしかしたら、トップアイドルの地位をこれから失うかもしれないことを、これからしようとしている。それを頭に入れておいて、コナンくん」

俺は、この時は秋月さんの言葉の意味が分からなかった。

だが、すぐ後に秋月さんが重大な決意をしていたことを知ることになる。

秋月さんに案内されて、俺は家に入り、秋月さんの自室に入った。

秋月さんの家族は出掛けていて、他には誰もいないとのことだった。

秋月さんの部屋に入ると、俺は探偵の習慣として部屋を観察した。

秋月さんは、女の子らしく可愛いヌイグルミでもたくさん置いてありそんなイメージだったが、そういう物は一切無かった。

部屋の感じは、男子高校生の部屋のようにだった。

「コナンくん。私の部屋を見て、どう思った？正直に言って！」

秋月さんは嘘を許さないような態度だったので、俺は正直に答えた。

「男子高校生の部屋みたいだね」

「その通り！さすがは高校生探偵の工藤新一さんね！」

俺は秋月さんが、俺の本当の名前を呼んだので、一瞬言葉に詰まった。

秋月さんはケータイで画像を俺に見せた。

画像は「工藤新一」が小学一年生の時のものだった。
もちろん。今の俺と同じ姿だ。

「コナンくん。あなたは高校生探偵の工藤新一なのでしょう？何故子どもの姿に戻っているのかは分からないけど……」

俺は誤魔化した。

「秋月さん。僕と新一兄ちゃんは親戚なんだよ。顔が似ているのは当たり前だよ」

秋月さんは真剣な表情で、言葉を続けた。

「工藤さん。僕はあなたが、その姿をしている秘密には興味は無いんです！探偵としてのあなたに依頼をしたいだけです。あなたの秘密を知ったとしても、他人に言い触らしたりはしません！」

そして秋月さんは服を脱ぎ始めた。

「秋月さん。何を……」

俺は慌てた。

「工藤さんの秘密を他人に言い触らしたりしないことを証明するために、僕の秘密を工藤さんに見せます！」

秋月さんは全ての服を脱いだ姿を、俺にさらした。

秋月さんの体は男性のものだった。

S T A G E ・ 5 秋月涼と江戸川コナン その1（後書き）

ご感想をお待ちしております。

STAGE・6 秋月涼と江戸川コナン その2

僕、秋月涼は全ての服を脱いだ姿を相手にさらしながら頭の中では、こつという行動をする決断をするまでの自分の考えを思い出した。

「江戸川コナン」と「工藤新一」が同一人物であることを、僕は確信していた。

高校生探偵として「日本警察の救世主」とまで呼ばれてマスコミにぎわせた「工藤新一」は有名なので、もちろん僕も知っていた。

だが、数ヶ月前から工藤新一について、全くマスコミで報道されなくなつた。

僕は特に工藤新一のファンではなかったので、そのことは気にしていなかつた。

絵里ちゃんからもらった毛利小五郎のデータによると、毛利小五郎の娘の「毛利蘭」は工藤新一の幼なじみで高校の同級生だとのことだつた。

工藤新一は最近学校は休学しており、噂によると、かなり難しい事件に掛かり切りになっていて、友人・知人の前に姿を見せてはいない。

「工藤新一」が姿を見せなくなつた時期と「江戸川コナン」が毛利探偵事務所に預けられた時期が、ちょうど一致するのだ。

「工藤新一は何からの理由で、子どもの姿になり、江戸川コナンを

名乗っているのではないか？」と僕は結論した。

絵里ちゃんに「工藤新一」が小学一年生の頃の画像をネットで見つけたしてもらったところ、「江戸川コナン」と同じ姿だったので、僕の確信はますます強くなった。

もちろん。僕の考えが穴だらけなのは、分かっている。

常識で考えて、高校生が小学一年生の姿になれるわけがない。

だが、夢子ちゃんのためには、警察を頼れない状況では「工藤新一」を頼るしか、僕には方法がなかった。

もし本当に江戸川コナンと工藤新一が同一人物だとしても、かなり重要な秘密だと思われるから、正体を認めてくれないかもしれない。

だから僕は、僕の秘密を相手に見せた。

もし本当に相手が「工藤新一」ならば、僕の真剣な覚悟が分かるはずだ。

「女性トップアイドル秋月涼が実は男」なんてことが世間に知れたら、僕の芸能生命は終わりだ。

僕の考えが間違いで、江戸川コナンが真正正銘の小学一年生ならば、僕の秘密を人に話さずにはいられないだろう。

これは僕にとって、賭けだった。

賭けに負ければ、僕は芸能界にいられなくなる。

僕の姿を見て「江戸川コナン」はしばらく無言でいた。

時間にすれば、一分にも満たなかっただろうが、僕は数時間にも感じた。

「江戸川コナン」が口を開いた。

「秋月さん。俺は、あなたの考え通り、工藤新一だ」

僕は賭けに勝った。

俺「江戸川コナン」は、いや「工藤新一」は、さすがに驚いた。

「女性トップアイドル秋月涼」が「実は男」だったことにだ。

彼女の……いや、彼の容姿や仕草は女性としてあまりにも自然で、俺は「女性」だとまったく疑わなかった。

こうして全部の服を脱いだ姿を見たら、性別を間違えることは無い。

俺が自分を「工藤新一」だと認めたことで、ホツとした表情になった秋月さんに、俺は慌てて声をかけた。

「秋月さん。とにかく服を着てくれ！男同士でも、裸のまま話をするのは、恥ずかしい！」

秋月さんは脱いだ服を床から拾って、着始めた。

「あの……秋月さん？」

「はい？何ですか？工藤さん」

「秋月さんは、下着も女性用のを着ているの？」

「見ての通りです」

秋月さんは、ブラもショーツも女性用の物だった。

ブラの中にはパッドを入れているようで、胸には膨らみがあった。

秋月さんの下着姿は、秋月さんがほっそりとした体をしているので、本当の女性のように見えた。

俺は、秋月さんが男だと分かっていたが、下着姿を見ているのが恥ずかしくなって、目を逸らした。

「ちょっと！工藤さん！何故？赤くなって！目を逸らすんですか！？」

秋月さんは下着姿のまま、俺に近づいて来た。

俺は慌てて離れた。

「何故？僕から離れようとするんです！男の僕が女装しているのが気持ち悪いからですか？」

俺は首を横に振った。

「いや、気持ち悪くはない。むしろ、綺麗だ。下着姿の女と向き合っているみたいで、照れるんだ」

秋月さんはガツカリと落ち込んだ。

「僕が男だと分かっている工藤さんにも、女らしく見えちゃうのか……男らしくなれるのは、いつの日なんだろう……」

秋月さんが女物のワンピースを着ると、俺に男性なのに「女性アイドル」をしている理由を説明し始めた。

「ふーん。涼も大変なんだな」

俺は涼に親近感を持った。

俺も涼も、本来の姿を偽って世間の目を欺いているということでは同じだ。

「涼？」

俺はウツカリ呼び捨てにしまったことに気づいた。

「すまない。そんなに親しいわけでもないのに、呼び捨てにするなんて、馴れ馴れしかったか？」

「いいえ。嬉しいです。僕も工藤さんのこと『先輩』って呼んで良いですか？僕は15歳で工藤さんは年上の17歳ですから」

「別に構わない」

涼は、とても嬉しそうな表情になった。

「良かった。僕は『男同士の友情』に憧れているんです。これから
もよろしく願います。先輩！」

俺は少し疑問に思ったことを口にした。

「涼はアイドルの仕事をしている時以外は、普通の男の姿でいるんだろ？男友達がいるんじゃないのか？」

涼は少し悲しそうな顔になった。

「僕は男友達のもりでいても、『付き合ってくれ！』『結婚してくれ！』なんて言われるんですよ。僕は、そんな趣味はないから断るしかなくて、結局は友達じゃいられなくなるんです。でも、先輩はずっと友達でいてくだないね」

「安心しろ。涼。俺にはちゃんと好きな女がいるんだ。涼に俺が愛の告白をするなんてことは絶対ない！」

「ありがとうございます！先輩！あと、一つお願いがあるんですけど……」

「何だ？涼」

「僕と先輩で、抱き合いませんか？」

「おーおい！涼！そっちの趣味は無いつて……」

涼は激しく首を横に振った。

「そういう意味じゃ、ありません！サッカーの試合でゴールした時、チームメイト同士で嬉しく抱き合いますよね？ああいうのに憧れているんです」

俺は納得した。

「それなら、別にいいけど」

涼は嬉しそうに俺を抱き締めた。

俺は中学の時にサッカー部だったから、ゴールを決めた時にチームメイトと抱き合うようなことはよくやった。

涼に抱き締められている感触と涼から感じる香りは、その時のとは全然違った。

どちらかと言うと、蘭が「江戸川コナン」を抱き締める時に近かった。

そんな事を言うと、涼を傷つけるので、俺は口には出さなかった。

僕、秋月涼はとても嬉しかった。

「江戸川コナンと工藤新一が同一人物である」という僕の考えが当

たっていたことも嬉しいが、僕が生まれて初めてかもしれない「男
友達」ができたことも嬉しかった。

僕は先輩を離れた後、会話を続けた。

夢子ちゃんのことについて、僕は先輩に依頼した。

先輩の容姿は「可愛い男の子」だ。

もちろん。こんなことは口に出せないけど、「弟」のようで可愛がり
たくなる。

従姉の律子姉ちゃんも、僕に対してこんな気持ちでいるのかな？

先輩は自分のことについて説明した。

「悪いが、俺が何故子どもの姿になっているかを説明することはで
きない。このことを話すと、涼も危険に巻き込むことになる」

僕はうなづいた。

「僕は先輩の秘密には興味ありません。先輩は自由に元の姿に戻る
ことはできないんですね？」

「ああ。だから探偵としての調査には、涼にも協力してもらうこと
になる。子どもの姿だと色々と行動が制限されるからな」

「僕にできることなら、協力は惜しみません。僕は夢子ちゃんの力
になりたいんですから！」

「それと、俺が『工藤新一』だと知っている人間はごく僅かだ。一緒に住んでいる毛利小五郎や蘭も、俺の正体は知らない。他の人間の前では、俺のことはあくまで子ども扱いしてくれ」

「分かりました。先輩」

「涼。その先輩と呼ぶのも、二人きりの時は良いが、他人の目があるときは止めてくれ。『コナンくん』とでも呼んでくれ、俺も『涼姉ちゃん』と呼ぶから」

「分かりました」

ここで、僕は一つの疑問を思い出した。

「先輩。あの灰原哀という女の子も、もしかしたら先輩と同じなんですか？」

先輩は少し虚を突かれたようだが、うなづいた。

「その通りだが、灰原のことは詮索しないでくれ。ところで、俺と灰原は本物の子どもじゃ無いって、何故思ったんだ？」

僕は二人に最初に会った時に感じた事を思い出しながら話した。

「なるほどな。涼は観察力があるし、結構鋭いな。お前には結構探偵としての才能があるのかもな。これからの調査では、俺の助手としてやってもらいたいんだが、良いか？」

「はい！もちろんです！」

僕は喜んで返事をした。

僕と先輩は、これからの具体的な調査について打ち合わせた。

「桜井さんは『誰かに尾行されたり、監視されているような気がする』と言っていたんだな？」

「そうです」

「考え方の一つとしては、桜井さんが、この前のストーカーに殺された事件がショックで、ありもしない別のストーカーを想像して、被害妄想しているというのもあるが……」

「そんなことは、ありません！」

僕は先輩に力強く反論した。

「夢子ちゃん被害妄想したりするような女の子じゃありません！夢子ちゃんが尾行や監視されていると言うのなら、それをしている人が現実にいるんです！夢子ちゃんを侮辱するようなことを言わないでください！」

先輩は少しうつらえた。

「涼。俺は考えの一つを言っただけで、結論がそうだと言ったわけじゃない」

僕は頭を下げた。

「すみません。怒鳴ったりして……」

「いいや。俺も言葉を選ぶべきだった。桜井さんは涼にとって大切な人みたいだな、どういう関係なんだ？」

「関係って……『友達』で『ライバル』ですけど？」

「本当にそれだけか？」

何故か先輩は、からかうようなニヤニヤ笑いをしていた。

何だろう？ 律子姉ちゃんが、僕と夢子ちゃんのことを聞く時のからかうような表情に似ている。

先輩は真剣な表情になった。

「話を戻すが、涼専用の車はいつでも自由に使えるんだな？」

「はい。大丈夫です」

「それなら、あの車で桜井さんの家に行こう。途中で寄ってもらった所もある」

僕「秋月涼」と「江戸川コナン」の探偵としてコンビを組んだ調査が開始された。

S T A G E ・ 6 秋月涼と江戸川コナン その2（後書き）

ご感想をお待ちしております。

STAGE・7 調査開始

私、桜井夢子は自宅の私の部屋で涼が持ってきた手作りクッキーを食べながら、少し戸惑っていた。

涼は私の家に来てから、たわいのない雑談をするだけで、昨日私が電話で話した事について一切触れようとしないのだ。

私が「誰かに尾行されたり、監視されているような気がする」と話したら、私の力になってくれると言ったのに……。

涼と一緒に来たのはメガネをかけた「江戸川コナン」という小学一年生の男の子だ。毛利探偵事務所で見かけた覚えがある。

その江戸川コナンは携帯ゲーム機でゲームをしながら、私の家の中を歩き回っている。

あのくらいの年頃なら仕方がないと思うけど、落ち着きの無い子どもだ。

「ねえ。涼。あのコナンっていう子どもは何なの？」

私は涼にたずねた。

「ちょっと知り合いから、今日一日面倒を見てくれって言われて預かっているの」

「ところで、涼。昨日、電話で話した事だけど……」

私が話を切り出そうとすると、携帯ゲームをしながら江戸川コナンが部屋に入って来た。

「涼姉ちゃん！ここにいるの飽きた！どっかに遊びに行こうよ！」

「そうね。コナンくん。どこかに遊びに行きましょうか？」

涼は立ち上がった。

私は、涼がこんな短時間で帰ってしまうのが寂しくて引き止めようとした。

私が口を開く前に、涼が私に顔を向けた。

「ねえ。夢子ちゃん。今日予定が無いんなら、一緒にお出掛けしない？」

数分後、私は涼と一緒に車の後部座席に乗っていた。

私と涼の間には、江戸川コナンが座っている。

車に乗ってもあいかわらず。携帯ゲーム機でゲームをしている。

この江戸川コナンという子どもは、別に私に悪意を持っているわけじゃないんだろうけど、私は邪魔に感じた。

この男の子のせいで、今日は私と涼は二人きりになれなかったんだし……。

な！何を考えているのよ！私は！「涼と二人きりになりたい」だなんて！

「ねえ。コナンくんは、どこに遊びに行きたい？」

涼は優しい笑顔をコナンに向けた。

私は涼のその笑顔を見て、内心で激しく動揺した。

何だろう？とっても嫌な気持ちだが、私の心の中を渦巻いている。

涼はプライベートで私と一緒にいるときは、私だけに優しい笑顔を向ける。

私が独占していた物を、コナンに取られてしまったような感じがた。

コナンは最近できたショッピングセンターに行きたいと言った。

「夢子ちゃんは、そこで良い？」

涼が今度は私に笑顔を向けた。

私は内心の動揺を表に出さないようにして同意した。

私たちはショッピングセンターの中をぶらぶらと歩いている。

「ねえ。コナンくん。ゲームの調子はどう？」

コナンは、今日私と会ってからずっとゲームをしている。今もゲーム機の画面を見ながら涼に返事をした。

「モンスターが二匹、僕のことを追いかけて来るんだ。二匹ともオスのモンスターだよ」

涼とは目を合わせずに会話をするコナンに、私はイラついた。

「ちょっと。コナンくん！お話をする時は、ちゃんと相手の顔を見なさい！涼も子どものしつけをちゃんとしなさいよ！」

私は口に出してから「しまった！」と思った。

コナンが泣き出してしまったら、どうしよう？

涼に嫌われてしまうかもしれない。

私の予想に反して、コナンは笑顔を私に向けた。

「夢子姉ちゃんは、良いお母さんになるね」

「な！なによ！突然！」

「子どもをちゃんと叱れるのは、良いお母さんである証拠だよ。怒って子どもに暴力を振るうお母さんは最低だけど、甘やかしてばかりで子どもを叱らないお母さんも良くないからね」

「マセたこと、言うわね……」

お母さん、かあ……。私もいつか結婚して子どもを持つことがあるんだろうなあ……。

私の旦那さまは、どんな人なんだろう？

私は旦那さまの顔を、頭に思い浮べて慌てた。

涼の男装姿なのだ。

私には断じて、そっちの趣味は無い！

この前、涼の男装姿を見て、それが結構美少年だったから、それを出しただけよ！そうに違いはないわ！

「夢子ちゃん」

涼が私に近づいてきた。

「な、何よ！？涼！勘違いしないでよね！私は、あなたのことを、そんな風に思っているなんてことは、絶対にないんだからね！」

「勘違いって、何なの？」

涼は、きょとんとしていた。

しばらく、ショッピングセンターのなかをぶらぶら歩いた後、私達は女性用下着の店に入った。

珍しいことに涼の方から、この店に誘ったのだ。

私と涼は何度か、一緒に遊びに行ったことがあるが、女性用下着の店に一緒に行こうと誘うと、何故か涼は拒否するのだ。

涼は自分の体にコンプレックスでも持っているのだろうか？

確かに胸は私の方が大きい。涼は自分のほっそりした体が嫌いなような感じだ。

涼は、そこが魅力なのに……。

涼は顔といい、体といい、性格といい、間違いなく正当な清纯派アイドルだ。

私は表向きは清纯派ぶっているけど、中身は違う。

そんな事を思いながら涼を見てみると、涼が一瞬チラリと店の表の方を見た。

私が涼の視線の先を見ると、大人の男性が二人いた。

何だろう？あの二人、店の中をチラチラ見ている。

「涼姉ちゃん！おしっこ！」

コナンが大声を出した。

「この店の奥にトイレがあるわ。女性用トイレしかないけど、ここから男性用トイレは遠いから仕方がないわね。夢子ちゃん一緒に来て！」

私達三人は女性用トイレに入った。個室が六つ並んでいるトイレだ。

涼に誘われたから、思わず一緒に入っちゃったけど、コナンの面倒を見るなら、涼一人で良いんじゃないかしら？

涼とコナンはトイレに入った途端に真剣な顔になった。

涼はトイレの中を歩き回って、見回した。

「コナンくん。大丈夫よ。他には誰もいないわ。そっちはどう？」

涼の質問にコナンはゲーム機の画面を見て答えた。

「このトイレに、盗聴器や隠しカメラのような物は無い。モンスターも店の外から動いていない」

私は二人の言っている意味が分からなかった。

「何？何なの？」

コナンはゲーム機の画面を私の方に見せた。

「夢子姉ちゃん。これは盗聴器の探知機にもなっているんだ。夢子姉ちゃんの家には盗聴器が仕掛けられていたよ」

コナンがゲーム機を操作すると、画像が変わった。

画像は、私がさっき見た店の表にいた二人組の男だった。

「この二人が夢子姉ちゃんの家を出てから、ずっと後をつけて来ているんだ」

私、桜井夢子が漠然と感じていた不安が現実の物となって目の前に現れた。

僕、秋月涼は夢子ちゃんの家に行く前に寄った場所のことを思い出していた。

車で新一先輩と行ったのは、欧州風の大きな屋敷の隣にある奇妙な建物だった。

「阿笠」と表札が出ていた。

新一先輩の話だと「阿笠博士」という発明家が住んでいる。先輩の正体を知っていて、先輩のためにいろいろな発明品を作ってくれるそうだ。

夢子ちゃんを襲った男を倒すのに使った「キック力増強シューズ」も博士の発明品だそうだ。

中に入ると、新一先輩は僕のことを博士に紹介した。

僕が「江戸川コナン」と「工藤新一」が同一人物であることを知ったことと、「灰原哀」が子どもではないことを知ったことを話した。博士は、さすがに驚いた表情をしたが、僕が二人の秘密を絶対に口外しないことを誓った。

それを保証するために、僕は僕の秘密「本当の性別」を博士に見せた。

さすがにまた驚いたが、博士は安心したようだった。

「博士。灰原は、どこだ？」

「吉田くんに誘われて、さっき遊びに出掛けたぞ」

「そうか。まあいいや。とりあえず今のところは、灰原の力を借りる必要は無さそうだ」

僕は少し疑問に思った。

「灰原さんは、新一先輩と同じ境遇なんでしょう？灰原さんは、新一先輩の探偵としてのパートナーじゃないんですか？」

新一先輩は難しい表情になった。

「相棒か……。確かに灰原は、俺にとっての相棒だけど、最近一方

的に俺の方から頼ってばかりいるような気がするな……。本当に灰原の力が必要になるまでは甘えるようなことはしたくないな」

新一先輩にとって灰原さんとの関係は複雑なようなので、僕はそれ以上そのことには触れなかった。

「博士。この前作った。アレを出してくれ」

「アレをか？ 新一は失敗作だと、言っていたではないか？」

博士は少し困惑していた。

「ああ。失敗作だけど、今回の調査には役に立つ」

博士は、携帯ゲーム機を取り出した。

「何ですか？ これは？ 携帯ゲーム機にしか、見えませんか？」

博士は自慢するように胸を張って、僕の質問に答えた。

「その通りじゃ。市販の携帯ゲーム機を、わしが改造した物じゃ。こっ操作すると……」

博士は普通にボタンを押した。

ゲーム機の画面にゲームが映った。

「この通り、ゲームができる」

僕の「当たり前じゃないですか」という表情が顔に出してしまったの

だろう。博士は慌てた感じで、次の説明に移った。

「しかし、このように隠しコマンドを入力すると……」

盗聴器や隠しカメラの探知機になり、尾行したい人物に発信機を着けると位置が分かるようになっていた。

「すごいじゃないですか、ゲーム機の形をしているのは、偽装のためなんですね。でも何で？これが失敗作なんですか？」

新一先輩は複雑な表情になった。

「今、俺は見ての通りの姿だから、小学校に通っているからなんだ」

僕は新一先輩の言葉の意味が分からず。きょとした表情になった。

「分からないのか？小学校に持って行ったら、没収されるだろ！」

僕は納得した。

それから僕と新一先輩は、夢子ちゃんの家に行つてからの細かい打ち合わせに移った。

僕と夢子ちゃんが雑談をしている間に、新一先輩は家の中を歩き回って盗聴器の有無を調べる。

夢子ちゃんの家を監視している怪しい人物がいれば、発信機を先輩が着ける。

僕たち三人で車で出掛けて、本当に尾行してくるのか確かめる。

尾行してくるのが、男の二人組だと分かったので、こうして女性用トイレで夢子ちゃんに状況の説明をしたのだ。

夢子ちゃんは、不安で一杯の表情になっている。

「涼。私は、どうしたら良いの？」

「夢子ちゃん。落ち着いて聞いてね。これから私たちが、すべき事は……」

僕は新一先輩から聞いていた計画を、夢子ちゃんに話した。

STAGE・7 調査開始（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・8 灰原哀と吉田歩美の尾行

私、灰原哀は同居している阿笠博士の最近の行動を奇妙に思っている。

テレビの芸能関連の番組を録画して、何度も繰り返して見ているのだ。

しかも「秋月涼」が出演している番組ばかりをだ。

「何度も見ても、可愛い女の子にしか見えんのう」

博士がテレビを見ながら、つぶやいた。

「私は可愛くない女の子で、悪かったわね」

私が、からかうような口調で言うと、博士は慌てた。

奇妙なことと言えば、最近の工藤くんも変だ。

学校が終わった後、少年探偵団のみんなに遊びに誘われても、断ってさっさと帰ってしまうのだ。

私は工藤くんは、また新発売の推理小説でも夢中になって読んでいるのだと、思っていたのだけど……。

「やっぱり怪しいわ。哀ちゃん!」

学校の休み時間、女子トイレの中で吉田さんは、私にそう言った。

「怪しいって……何が？」

「もちろん。コナンくんのことよ！」

「江戸川くんが、どうかしたの？」

「コナンくん。最近あたしたちと遊ぼうとしないから、何をしているのかな？と思って、昨日コナンくんの家に行ってみたの」

工藤くんの家とは、この場合は毛利探偵事務所のことだ。

「コナンくんの家の前まで行ったら、ちょうどコナンくんが家から出て来て、家の前に止まった自動車に乗り込むところを見たの」

「自動車って、博士の？」

「ううん。見たことない高級そうな車だったわ。哀ちゃん。重要なのは車じゃなくて、その車にコナンくんと一緒に乗っていた人のことなの。その人が誰だったと言うと……驚かないでよ」

吉田さんは周囲を見回して、トイレに私たち以外いないことを確かめてから、声を潜めた。

「アイドルの秋月涼だったの」

その日の放課後、私と吉田さんは博士の運転する車の後部座席にいた。

車は、毛利探偵事務所の入り口が見える場所に停車している。

吉田さんと私は、工藤くんを尾行することにしたのだ。

「コナンくんは蘭お姉さんみないな『お姉さんタイプ』が好みだと思っていたのに、涼お姉さんみないな『妹タイプ』も好みだったなんて……妹タイプなら、あたしにだって資格はあるのに……」

吉田さんは少し悔しそうな顔をしていた。

吉田さんが「江戸川コナン」に恋をしていることは、最初に会った時からハッキリしている。

でも「江戸川コナン」は実在していない人間なのだ。彼はいつか「工藤新一」に戻って「江戸川コナン」はいなくなってしまう。

そう考えるたびに、私は吉田さんに対して心が痛む。なぜなら、その原因の一部は私にもあるからだ。

「ねえ。吉田さん。円谷くんや小嶋くんは本当に誘わなくて、いいの？」

私は内心は隠して、別のことを尋ねた。

「うん。あの二人にコナンくんのことを調べるのに協力してもらったのは、悪いから……」

「何で、悪いの？」

私の何気なくした質問に、吉田さんは驚いたように目を見開いて答えた。

「もう。哀ちゃん。鈍いなあ。あの二人はあたしのこと好きなのに、あたしがコナンさんの浮気疑惑を調べるのに誘うわけにはいかないでしょ？」

私は少し驚いた。円谷さんと小嶋くんが、吉田さんのことが好きなのは態度であらわしているが、それに吉田さんが気づいたような素振りを見せたことが無かったからだ。

私は、そのことを吉田さんに尋ねた。

「うん。光彦くんや元太くんとは小学生に入る前からの幼なじみで、あたしのことが好きなのは分かっていたわ。でも、その頃のあたしは恋する気持ちが分からなかったし、二人ともあたしに対してハッキリと好きなこと言わないから、あたしも二人の気持ちに答えるようなことはせずに、ずっと『幼なじみの友達』でいたんだ」

吉田さんは、どこか遠くを見るように目をした。

「でも、あたしコナンくんに出会って、初めて恋する気持ちが分かったの！」

そして真剣な目で、私を見た。

「だから、あたしはコナンくんに、あたしがコナンくんを好きなように、あたしのことを好きになって欲しい！」

そして明らかに何かを決意して、次の言葉を口から出した。

「だから、哀ちゃん。正直に答えて……コナンくんのことを、どう思っているの？」

私は吉田さんに意表を突かれた。

私は戸惑いながらも、声を出した。

「私は……工藤くんのこととは……別に……何とも思っていないわ」

「誤魔化さないで！哀ちゃん！」

吉田さんは一刀両断するように言った。

「コナンくんは事件が起きた時、あたしたち少年探偵団で一番頼りにしているのは哀ちゃんだし、哀ちゃんも何だかんだ言ってもコナンくんを頼りにしているんじゃない！」

「でも……それは……」

私は言葉に詰まった。

工藤くんと私がお互いを頼りにしているのは、体が幼児化するという境遇にある世界でただ二人の人間だからだ。

ただ、それだけのはずだ。

でも、何だろう？そう考えたら寂しくなった。

第一、工藤くんには、蘭さんという人が……。

私が自分の考えに夢中になり黙り込んでしまうと、吉田さんは一転して優しい笑顔になった。

「哀ちゃんって、恋愛については、あたしより子どもなんだね」

実際には十歳ぐらい年下の彼女に、そう言われて驚いたが、彼女の言う通りかもしれない。

私は同世代の人間と友達付き合いたことも、恋愛関係になったことも無い。

その点では、私は吉田さんより子どもなのだろう。

吉田さんは、私の両手を握った。

吉田さんの手は暖かった。

「哀ちゃん。哀ちゃんが恋する気持ちが分かったら、強力なライバルになると思うけど、正々堂々戦いましょう!」

私はうなずくしかなかった。

「あー。その。すまんの」

運転席の博士が、話し掛けて来た。

「コナンくんが出て来たぞ」

車の窓から見ると、工藤くんが階段から降りて来た。

しばらく工藤くんは待っていたが、工藤くんの前に車が止まった。

車の後部座席のドアが開いて、工藤くんは乗り込んだ。

開いたドアの中には、確かに秋月涼さんがいた。

工藤くんが乗り込んだ車は走り出した。

博士も車を動かして、尾行を始めた。

工藤くんと秋月さんの車を追い掛けてしばらくは、何も起きなかった。

吉田さんは集中して前の車を見ている。

ハッキリ言うと、この尾行には私は反対している。

吉田さんが心配しているように、工藤くんが秋月さんに気持ちが悪くなんてことがあるわけ無い。

彼には蘭さんという世界で一番大切に思っている女性がいるのだから……。

おそらく、あの名探偵さんはいつものように事件に首を突っ込んでいて、調査のために秋月さんと一緒にいるのだろう。

でも、そのことを吉田さんに言うわけにはいかないし、かと言って吉田さんを放っておけば、一人で工藤くんを尾行しようとするかもしれない。

それは危険なので、私も吉田さんと一緒に尾行することにしたのだ。

博士が最近「秋月涼」について熱心に見ていたことからすると、博士は工藤くんの行動について何か知っているようだ。

それとなく尋ねてみたのだが、工藤くんから口止めされているらしく博士は言葉を濁した。

私は、それ以上は追求しなかった。「組織」と関係の無い事件ならば、私に危険が降り掛かることは無いし、興味も無いからだ。

博士の車で尾行しているのは、工藤くんに気づいてもらうためでもある。

彼なら気づいたら、すぐに対策を立てるだろう。

マナーモードにしておいた私のケータイに、メールが届いた。

吉田さんに気づかれないように、私はメールを見た。

「次のファミレスの駐車場で」

予想通り、名探偵さんからだった。

工藤くんたちの車はファミレスの駐車場に入って行き、私たちの車も後を追った。

「あれれー？灰原と歩美ちゃんじゃない？どうしてこんなところにいるの？」

駐車場で工藤くんは子どもらしい声を出して、私たちに近づいて来た。

「工藤くん。博士にドライブに連れてもらっていたのよ。そうよね？歩美ちゃん」

うろたえている歩美ちゃんを元気づけるように、私は声をかけた。

「う、うん。そうなの、コナンくん」

私は本題に入ることにした。

「ところで、工藤くんは何をしているの？」

「うん。それはね……」

私と工藤くんは事前に打ち合わせをしたわけでは無いが、歩美ちゃんを納得させることができる作り話を始めた。

この名探偵さんと出会ってから、私はいつの間にか彼の「相棒で助

手」にされてしまったので、そういう事に慣れてしまった。

そのことは特に不快なわけでは無い。

「コナンくん。立ち話も何だから、お店に入ろう」

秋月さんに誘われて、私たちは店に入った。

「コナンくん。涼お姉さんと一緒にいたのは、そういう事だったんだ！安心したー」

テーブルに着いて工藤くんの説明を聞いた吉田さんは納得した。

秋月さんがドラマで小学一年生の弟がいる姉の役をすることになったそう。秋月さんは一人っ子のため姉の気持ちが分からないので、工藤くんに練習相手を頼んだそう。

工藤くんの言っているのは、嘘だと私にはすぐに分かった。

彼とそれなりに長い付き合いのせいか彼の表情や口調から、それが分かるようになってしまった。

今の工藤くんの表情は、探偵として事件に関わっている時のモノだ。

「はい。博士にはウーロン茶、歩美ちゃんにはオレンジジュースを持って来たわ」

ドリンクバーから、秋月さんが飲み物を持ってきた。

「コナンさんと灰原さんは、コーヒーのブラックで良いわね？」

その秋月さんの言葉に、私は奇妙に思った。

私も工藤くんもドリンクを特に指定はしなかった。

そういう場合、私と工藤くんの正体を知らない人は、たいていジュースを持って来る。

小学一年生にブラックコーヒーを持って来るとするのは、さらにあり得ない。

（まさか！私たちの正体、秋月さんに知られているんじゃないでしょうね？）

という目付きで、工藤くんを見た。

（大丈夫だ。心配するな）

と、工藤くんは目で返してきた。

（どーだが、あなたの大丈夫はイマイチ信用できない……）

「哀ちゃんとコナンくん。ヤッパリ、そうだったんだ」

いきなりの吉田さんの発言に、私と工藤くんは思わず彼女に顔を向けた。

「今、目と目で会話してたじゃない！まるで恋人同士か、夫婦みた
いだったよ！」

騒ぎ立てる吉田さんを落ち着かせるのに、しばらく時間が掛かった。

STAGE・9 夢子のキャンディ その1

僕、秋月涼はドラマ「アイドル探偵 秋月涼」の撮影のためにテレビ局に来ている。

夢子ちゃんは、このドラマの仕事以外も僕と一緒にの仕事が多くなるように、社長に頼んで手配してもらった。

そうすれば、僕が毎日車で夢子ちゃんを送迎しても不自然ではないからだ。

それに芸能界の一般的な評価では、僕と夢子ちゃんは「仲の良い友達」だと思われる。

だから、一緒にいる時間が多くなっても、周囲からは奇異には思われていないようだ。

そう言えば、夢子ちゃんは僕のことをどう思っているんだろう？

最初会ったばかりの頃よりは、打ち解けていると思うけど……。

まあ。夢子ちゃんが僕のことをどう思っているかなんて、どうでもいい。

僕が夢子ちゃんのことを守りたいと、思っているのは確かなのだから……。

「どうも初めまして、菊地真さん。秋月涼です」

「涼。初めましてって……何度も今まで会っているじゃないか？」

ドラマの撮影がテレビ局のスタジオで始まった。

今、僕は毛利探偵事務所で助手のアルバイトをしている男子高校生「秋月涼太」が、女装して女性アイドル「秋月涼」に変装しているというドラマの設定になっている。

そしてテレビ局で「菊地真」に出会うというシーンの撮影だ。

「秋月涼太」は、自分が偽物で男だとバレないかドキドキしている設定だ。

そう言えば、現実の僕も女性アイドルを始めたばかりの頃は、自分が男だとバレないか常にドキドキしていた。

でも、今では女性としてのしゃべり方や仕草にも慣れてしまって、そういうドキドキはほとんど無くなった。

うう……。ますます、僕の本来の目的である「男性アイドルとして格好よくなりたい」から遠ざかっているなあ……。

今日、ドラマの撮影と一緒にいる菊地真さんは765プロ所属の女性アイドルで、従姉の律子姉ちゃんからの紹介で知り合った。

一緒にトレーニングをしたし、真さんが主演のミュージカルにも出

演させてもらったり色々とお世話になった。

真さんはボーイッシュな外見から、女性ファンが多い。

僕が最初に真さんと知り合った頃は、失礼なことに長い間男性だと勘違いしていた。

でも真さんは素敵な女性であることが、今では分かっている。

僕が頭の片隅で、そんなことを考えながら撮影は順調に進んだ。

「涼！」

いきなり真さんが、僕が演じている「秋月涼太」の手首を強くつかんだ。

「痛いです！真さん！何をするんですか！？」

真さんは怖い目で「秋月涼太」をにらんでくる。

「涼！いや！キミは涼じゃ、ないな！本当の涼をどこにやった？」

「秋月涼太」は焦りながらも答える。

「何を言っているんですか？真さん。見ての通り、私は本物の秋月涼ですよ！」

「確かにキミの見た目は、涼ソックリだ！だがキミが涼ではないと証明する方法がある！」

「証明する方法？それは何ですか？」

真さんは勝ち誇る顔を「秋月涼太」に向けた。

「涼はれつきとした可愛い女の子だが、キミは男だろ？男じゃないと言っのなら、服を脱いで、裸を見せてみる！」

「秋月涼太」は呆然となった。いや、僕「秋月涼」が地で呆然となつてしまった。

真さんはドラマの脚本通りに、演技をしているだけだと分かっている。

だけど、真さんが僕をにらみつける視線が本当に怖かった。

現実で、真さんは「秋月涼」のことを本当に女の子だと思っている。つまり、僕は真さんを騙しているのだ。

現実に真さんが僕が「男」だと知ったら嫌われて、本当に怖い目で僕をにらむんじゃないか？

そう思ったら、本当に僕は呆然として、恐怖で自分の顔が蒼白になるのを感じた。

「よーしっ！カット！」

監督さんから声がかかった。

「いいよ。涼ちゃん。名演技だったよ！その表情！呆然として恐怖しているのが、リアルだったよ！」

「ありがとうございます。監督」

演技ではなかったのだが、お礼の言葉を僕は監督さんに返した。

「涼。大丈夫？本当に顔色悪いよ？手首をつかんだ時、ボクが力を入れ過ぎたかな？」

真さんが僕の心配する表情を向けた。

当たり前の事だが、真さんが僕をにらんだのは、ただの演技だったのだと再確認した。

「大丈夫です。真さん」

僕は真さんを安心させるために、笑顔を向けた。

次の撮影まで時間があるので、僕と真さん、夢子ちゃんの三人は楽屋でおしゃべりすることにした。

僕と真さんは、トレーニングとミュージカルの時のことの思い出話をした。

私、桜井夢子は今ムカついている。

理由は分からない。

だけど、涼と真さんが二人で楽しそうにおしゃべりしているのを見ていると、何故か気分が悪くなるのだ。

何なんだろう？この気持ち？

最近いつも同行していた「江戸川コナン」という小学一年生の男の子は、今日はいない。

ここ数日、私のことを尾行していた男たちをコナンくんは監視していたが、テレビ局の中まで入ってきたことはないそうだ。

コナンくんの考えでは、テレビ局はセキュリティの厳しい所なので、男たちにはテレビ局の中に入る手段は持っていないと推測できるそうだ。

小学一年生の男の子が、そこまで考える事ができるのは凄いというより、異常だと思ったが、コナンくんはあの有名な高校生探偵「工藤新一」の親戚だそうだ。

工藤新一は今別の事件に関わっていて、ここに来ることはできないそうだが、コナンくんはケータイで連絡して、工藤新一の指示に従っているそうだ。

工藤新一の指示により、コナンくんは調査に出掛けている。

私が襲われたり、尾行されたりしているのは、何故なのか？その理由を探るためだ。

だから、今日は涼と私は二人きりになれると思っていたのに、菊地

真さんもいるなんて……。

な、何を考えているのよ！？私は！

これじゃあ。私が涼と二人きりになりたがっているみたいじゃない！
私が襲われて、尾行されるようになってから、私はずっと不安でいる。

でも、涼と一緒にいる時には不安は薄まる。

何故。なんだろう？

理由は分らないが、涼と一緒にいると安心できる。

うーん。うーん。何故？なのかな？

そうか！私の気持ちがあった！

アニマルセラピーみたいなものだ！

可愛いペットと一緒にいると、精神的に癒されることがある。

それと同じで、涼は可愛いらしいのは確かだから、私は精神的に癒されているのだろう。

よし！ペットにご褒美をあげよう！

「涼。そう言えば、さっき本当に顔色悪くなっていたみたいけど、大丈夫なの？」

「心配してくれて、ありがとう。夢子ちゃん。」

涼は私に微笑んだ。

「気分の良くなるキャンディをあげるから、これをなめなさい」

「うん。ありがとう」

私が渡したキャンディを、涼はあっさり口に入れた。

涼は以前私が、蹴落とそうとしたライバルに超激辛飴を食べさせようとしたことを知っているのに……疑いもせずに口にした。それだけ、涼は今は私のこと信用しているということなのかな？

もちろん。今、涼に渡したのは超激辛飴などではない。

私の手作りのキャンディで、私も何度か食べていて、本当になめると気分が良くなる。

だから、涼の体に悪い影響があるはずがないのだが……。

「う。う。う。苦しい！」

涼が苦しみ出した。

「涼。どうしたんだ？」

「涼！」

真さんと私は床に倒れた涼に、駆け寄った。

「か、体が……熱い……」

そんな！確かに涼が食べたキャンディは害の無い物なのに！

私が少しパニックになっている間に、真さんは楽屋から跳び出した。楽屋の外を通りかかったスタッフに、救急車を呼んでくれるように頼んでいた。

「とにかく、桜井さん。涼をソファーに寝かせよう」

楽屋に戻って来た真さんと協力して、涼を持ち上げてソファーに寝かせた。

「苦しい……。胸が……」

ソファーに寝ている涼が、うわごとを言っている。

「とにかく、ブラをはずして、胸を楽にしてあげよう！」

真さんと協力して、私は涼の上半身の服を脱がせて、ブラをはずした。

ブラをはずすと、そこに私は意外な物を見た。

「パッド？」

そう。涼はブラの中に詰め物をしていたのだ。

僕、秋月涼は、意識が戻って来た。

気がついたら、僕は上半身裸になってソファーに横になっていた。

夢子ちゃんと真さんが、とがめるような視線で僕を見ている。

「涼。こんな物で、人を騙していたのね」

夢子ちゃんが手にパッドを持って、僕に突き付けた。

そつか……。僕の正体がバレちゃったのが……。

「ごめんなさい。夢子ちゃん。真さん。どんなに責められても許されないことを、私はしちやたんだと思う」

僕の両目から、涙が流れ出た。

もう。真さんと夢子ちゃんとは友達でいられなくなると思うと、悲しくなったのだ。

「ちょっと！涼！泣くことはないでしょ！私は騙されたなんて言っちゃたけど、それほど酷い嘘じゃないわよ」

「むしろ。ボクは涼の気持ち分かるよ。女の子なら少しでも大き

く見せたいものだからね」

一転して、夢子ちゃんと真さんは僕を安心させるような態度になった。

夢子ちゃんはパッドを手に持って、呆れた顔をした。

「ブラの中にパッドを入れているから、涼は実は貧乳なのかと思っただけで、形も大きさも立派なものじゃない。それなのにパッドを入れれば胸が苦しくなるのは、当たり前よ！」

僕は夢子ちゃんの言葉の意味が分からなかった。

あれ？変だな？僕はいつも女装している時には、胸にパッド入りのブラを着けているので、その重さを体に感じている。

今、上半身裸なのだから、胸は軽くなるはずなのに、いつもより重さを感じている。

僕は自分の胸を見た。

「ぎゃおおおん」

胸が膨らんでいる！誰が見ても女性の胸だと判断する物になっている！

両手で自分の膨らんだ胸をつかんだ！

作り物とかじゃない！本物の女性の胸だ！

さらに下半身にも違和感があつたので、僕は自分の股の間に手を伸ばした。

「ぎゃおおおん」

僕が男だと証明する物が無くなっている。

これじゃあ。僕は完全に女だ！

この時、僕はパニックで何が起きているのか、冷静に判断できなかった。

しかし、僕の体が女性化したことが事件が進展する切っ掛けとなった。

S T A G E ・ 9 夢子のキャンディ その1（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・10 夢子のキャンディ その2

俺、工藤新一のケータイの着信音が鳴った。

俺は「工藤新一」のケータイと「江戸川コナン」のケータイを別を持っている。

着信音が鳴ったのは「江戸川コナン」の方だった。

ケータイのディスプレイを見ると、公衆電話からだった。

公衆電話からの電話に、俺は少し不審に思いながらも電話に出た。

「コナンくん。私よ。涼お姉さんよ」

「涼姉ちゃん。どうしたの？」

涼が女性としての口調で話すので、俺も小学一年生としての口調で話した。

「今、病院にいるの。病院ではケータイ禁止だから、病院の公衆電話からかけているの」

なるほど。病院の公衆電話では、周りの誰に声を聞かれるか分からないから、涼は女性を演じているのか。

それより、俺は涼が病院にすることが気になった。

「えっ！？夢子お姉ちゃんに、何かあったの？」

「いいえ。夢子ちゃんは無事よ。私が倒れちゃたの」

「涼姉ちゃんが倒れたって……。涼姉ちゃん。大丈夫なの？」

「念のため病院で検査を受けたわ。お医者さんの診断では、私は何の異常も無い健康な『女の子の体』だそうよ。コナンくん。私は今『女の子の体』なのよ？意味は分かる？」

「うん。分かるよ。涼姉ちゃん」

涼は「女の子の体」を強調した。

そのことから、俺は涼が今どんな状態にあるのか推測できた。

さすがに驚いたが、今日の調査結果からはありうる事態だった。

「体が大丈夫なら、これからの行動は、予定通りで良いの？涼姉ちゃん？」

「ええ。私の両親が仕事で、しばらく留守にするから、今夜から夢子ちゃんに私の家に泊まってもらいわ」

「分かった。僕の方の調査は終わったから、夕方にはそっちに合流するね」

俺は通話を終えると、周囲を見回した。

俺が今いるのは、米花町から電車で一時間以上かかる駅の駅前だ。

調査に行った場所の近くの駅がここだったのだ。

俺は電車で一人でここまで来たから、当然帰日も電車に乗らなければならぬ。

ただ、それだけのことなのだが、今の俺には結構難関なのだ。

小学一年生の姿で一人で電車に乗っていると、迷子か家出だと思われる、車掌や駅員に保護されてしまう可能性が高いのだ。

その煩わしさを避けるために、普段は遠出する時には阿笠博士に車で連れて行ってもらうのだが、今回はそうすることは、できなかった。

今日の調査を灰原に知られるわけには、いかなかったからだ。

博士は灰原に少しきつく聞かれたら、俺の調査場所を話してしまうだろう。

俺の推理が当たっているのならば、灰原に今日の調査は止められただろう。

そんなことを考えながら、俺は駅前で駅に入っていく人たちを見ていた。

（よし！あの人にしよう！）

俺は目当ての人物が見つかったので、その人のすぐ後ろを歩いて駅に入った。

俺の目の前を歩いている大人の人が、どこの誰だかは知らない。

ただ小学一年生の子供がいてもおかしくない年格好なので、すぐ後ろを歩いているだけだ。

こうすれば、親子連れでいると思われる、駅員に保護される可能性は低くなるからだ。

俺の帰りのキップは、すでに買ってある。

改札を通ると、その大人は俺が乗る電車とは反対方向のホームに向かった。

俺は自分の行くホームに行くと、また条件に合う大人を探した。

これを繰り返して、俺は涼の家の最寄り駅に向かった。

俺は涼の家の前に着いた。

さりげなく、家の周りを観察すると一台の車が止まっていた。

車の中には、いつも桜井さんを尾行している男二人組がいた。

今のところは、家に踏み込んでくる可能性は低いと、俺は考えているので、ひとまずは安心している。

インターホンで呼び出すと、涼が出た。

「いらっしやい。コナンくん」

涼が玄関のドアを開けて、俺は中に入った。

家の中に入ると、カレーの匂いが流れて来た。

「今夜はカレーよ。コナンくん。先に食事にする？それとも、お風呂にする？」

「汗をかいたから、お風呂に入りたいよ。涼姉ちゃん」

「分かったわ。夢子ちゃん。コナンくんをお風呂に入れてくるから、お夕飯は後で良いかしら？」

すでに食卓に着いていた桜井さんは、無言のままうなづいた。

この時、桜井さんは不機嫌そうな表情をしていたが、彼女の置かれた立場からくる緊張のためだと、俺は考えた。

そうでなかったことは、この少し後に分かることになる。

俺と涼は二人で脱衣室に入った。

ドアを閉めると、涼は着ていた服を全て脱いだ。

俺は涼の裸を以前に一度見たことがある。

華奢ではあるが、間違いなく男性の体だった。

しかし、今は誰が見ても女性の体になっている。

「驚かないんですね？新一先輩」

涼は女の子としての演技を止めて、男子高校生としての本来の自分の口調で話した。

「ああ。でも、涼もパニックになってはいないようだな？」

俺も小学一年生としてではなく、本来の男子高校生としての口調で話した。

「確かに最初は少しパニックになりましたけど、新一先輩も十七歳の体が七歳に変化するなんて、ありえない状態が現実になっているでしょう？それに関連しているんじゃないかと思って……。そうじゃ、ないですか？」

涼はその華奢な外見に似合わず。結構鋭いし、図太い。

「涼の考えている通りだ。涼の体が女性化したのは、俺の体が幼児化したのと同様がある。詳しいことは晩飯の後に話す」

俺も服を脱いで、涼と一緒に浴室に入った。

俺と涼は、湯船に浸かると向かい合って雑談をした。

雑談の内容は、男子高校生同士がよくする内容の無い物だが、俺にはそれが楽しかった。

体が幼児化してからは、こうやって気楽に話せる相手がいなかったからだ。

少年探偵団のみんなとは友達だが、年齢が違うから話題が合わないことがある。

俺の正体を知っている阿笠博士とは歳が離れているし、灰原は女だから話題にできないこともある。

服部とは話が合うが、たまにしか会えない。

涼は嬉しそうに微笑んだ。

「新一先輩。僕はこうやって、男友達と一緒に風呂に入るのが夢だったんです」

「修学旅行とかで、同級生と一緒に大浴場に入ることがあったんじゃないか？」

涼は少し嫌な顔をした。

「小学校の時も、中学生の時も、僕が男だと分かっている男子に告白されたりしたんですよ。一緒に大浴場に入ったりしたらどんなことになるか、僕も身の危険を感じましたし、先生も心配して、僕はみんなと入浴時間をずらして、一人で大浴場に入ったんです。寂しかったですよ」

「そうか、涼も色々大変だな」

俺は涼に視線を合わせて話している。

涼はまた嬉しそうな顔になった。

「新一先輩は、僕が女の体になっても目を逸らしたりしませんね？」

「涼を男扱いしているから目を合わせているんだが、女になった体を、俺に見られるのは嫌か？それなら目を閉じるが……」

涼は首を横に振った。

「いいえ。新一先輩には僕を男扱いして欲しいですから、そのままいてください。こんな体になった僕を男扱いしてくれてありがとうございます」

俺は涼に笑顔を返した。

「俺の方こそ、七歳の姿の俺を『新一先輩』と呼んでくれて、ありがとう。いつも同世代から子供扱いされているから、嬉しいんだ」

突然、浴室のドアが外から開いた。

私、桜井夢子は今とても不機嫌だ。

涼が倒れて一緒に病院に行って、検査の結果は異常無しと判明したので、予定通りに涼の家に来た。

その時は私は上機嫌だった。

涼が夕飯の支度をしているのを眺めていた。

私も手伝うと言ったのだが、涼が「今日のお夕飯は私に任せて、夢子ちゃんには明日の朝ご飯やってもらうから」と言うので任せた。

涼のエプロンを着けて台所に立つ姿は可愛らしくて、同じ女としては悔しくもあるけど、その姿を見ているだけで気分が良くなった。

私が男だったら涼のことを、絶対に私の嫁にするわね。

そうなのよね。私たち女性アイドルは恋愛禁止だけど、涼もいつかは誰か男と付き合つて、結婚するのよね。

涼みたいな女の子が告白すれば、相手はどんな男でもOKするでしょうね。

そう言えば、涼がどんな男性がタイプなのか聞いたことないわね。

この機会に聞いてみることにしよう。

「ねえ。涼。涼は、どんな男性と付き合いたいと思う？」

小皿でカレーを味見していた涼が嘔き出した。

「夢子ちゃん。突然、何なの？」

顔を赤くして振り向いた涼は、可愛らしかった。

「わ、私は男の人と付き合うつもりは無いわよ！」

「私たち女性アイドルは恋愛禁止だから今はそうだけど、将来の話よ」

「私は未来永劫、男の人とお付き合いする気は無いの！」

涼はキツパリと言った。

男の人と未来永劫付き合う気が無い？

それから考えられることは二つだ。

一つ目は、涼は同性愛者で女性しか恋愛対象にならないということ。

二つ目は、涼は過去に男性関係で心に傷があるということだ。

一つ目について質問するのは、何だか怖いから二つ目について質問しよう。

「涼は何か過去に、男性関係で嫌な思い出でもあるの？」

涼は過去のことを思い出す目をした。

「女性アイドルとしてデビューする前に、親切にしてくれる男の『先輩』や『友達』がいたの。私はあくまで『先輩』『友達』として好きだったんだけど……。相手がそれ以上の関係を求めてきて……。」

なるほど。涼は潔癖なところがあるから、相手に下心があると思うと拒否してしまうのね。

「じゃあ。涼は軽い男性不信なの？」

「一時期は、そうだったことあるけど、今は信頼している男の人がいるわ」

「誰なの？」

「新一先……。いえ。江戸川コナンくんよ。彼は本当の私を知っているから」

その言葉に私は少しイラッとした。

「何よ？私は本当の涼のことを知らないって言うの？」

涼はうなづいた。

「うん。ある意味。今、夢子ちゃんが見ている私は嘘の私だから」

「でも。江戸川コナンには本当の涼を見せているのよね？」

「うん。コナンくんは本当の私のことを理解してくれてるから」

「だったら、私にも本当の涼を見せなさいよ！」

口論になりかけたところで、インターホンが鳴った。

江戸川コナンが来たのだ。

涼とコナン、二人の態度から、二人がお互いに信頼しているのが分かった。

私は不機嫌になった。

何よ！コナンは涼と最近会ったばかりなのに、それより前から涼を知っている私より信頼されているなんて！

私は二人が入っている浴室のドアを開けた。

STAGE・10 夢子のキャンディ その2（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・11 夢子のキャンディ その3

私、桜井夢子は浴室のドアを勢いよく開けた。

「夢子ちゃん！突然、何なの？」

湯船に一緒に入っていた涼とコナンは、私から目を逸らすと逃げるように浴室の奥の方に行った。

大人二人が入れば一杯になるぐらいの浴室だから、奥の方に移動してもたいして変わらないのだけど、涼の私を避けるような行動にイラッとした。

「何よ？私はお風呂に入りたいから、入るのよ」

「夢子ちゃんはコナンくんが来る前に、入浴してもらったじゃない！」

「もう一度、入りたくなったのよ」

「それなら、私とコナンくんが出た後に……」

「待てないわ。今入る！」

私は服を脱いだ。

「夢子ちゃん！裸が見えちゃうよ！」

「別に構わないわよ。涼と私は、女同士なんだし」

「私はともかく、コナンくんは男の子だし……」

「七歳の子供に裸見られたって、何ともないわよ」

私は服を全部脱ぐと、浴室に入った。

「あの……夢子姉ちゃん。質問があるんだけど……」

コナンが私に背を向けたまま質問してきた。

「何よ？質問ってのは？」

自分でもコナンへの態度が、きつくなっているのが分かる。

七歳の子供に対する態度じゃないのは、分かっている。

でも、コナンが私より涼に信頼されていて、私も知らない本当の涼の姿を知っていると思うと、コナンに対して私の心の中に嫌な気持ちが始まるのを止めることはできなかった。

「涼姉ちゃんと僕がお風呂の中で話していた話の内容、聞いたの？」

「聞いてないわよ！立ち聞きする気はなかったし！」

涼とコナンの風呂の中での会話を聞いてないのは、本当だ。

頭に血が上っていて、浴室のドア越しの会話なんて耳に入らなかった。

「ところで、涼。あなたにあらためて聞きたいことがあるんだけど……」

「夢子ちゃん。何？聞きたいことって？」

涼は何故か顔を赤らめて、私から目を背けている。

「涼は私のこと、どう思っているの？真剣に答えて！」

ついに聞いてしまった。この質問は、私が口に出すのを避けてきた物だった。

今は周囲の人間は、涼と私は『親友』だと誰もがおもっている。

でも、涼と私の最初に出会った頃は、関係は最悪だった。

原因は私自身にある。涼に色々と嫌がらせをしたのだから……。

そんなことをしたのだから、涼は私を嫌いになって離れていくのが当然なのに、私に構ってくる。

最初はそれを鬱陶しく思っていた私は、今では涼と一緒にいる時間が一番楽しい。

私にとっての涼は『ライバル』『友達』という言葉だけでは表せないほどに、大切な存在になっている。

でも涼にとっては、私は何なんだろう？

涼にとっては私は『ただの知り合い』で、親切にしているだけなの

かもしれない。

そう涼に答えられるのが怖くて、聞かなくていい。

だけでも、コナンが私より涼に信頼されていて、コナンが私の知らない涼の本当の姿を知っていると分かった今は、聞かずにいいからなかった。

涼は考え込んでいる表情になった。

数秒間、私も涼もコナンも無言になった。

私は涼がどんな答えを返してくるのか怖かったが、黙ってそれを待った。

「夢子ちゃん」

涼が口を開いた。

「夢子ちゃんは、私にとって『ライバル』『友達』という言葉だけでは表せないほど大切な人だよ」

私は嬉しかった。涼が私を私と同じように思っているのが分かったからだ。

さらに私は質問をした。

「それなら何で？コナンを私より信頼していて、コナンに私も知らない本当の涼の姿を見せているのよ！」

「夢子ちゃんを守りたいからだよ！」

涼は真剣に言った。

「夢子ちゃんの身に起きている事件を解決するには、私一人の力じゃ無理なの。誰か信頼できる人の力が必要な。コナンくんは小学一年生だけど、親戚の高校生探偵工藤新一さんから探偵として色々な事を教わっているから、探偵として信頼しているの」

私は涼がコナンを信頼しているのが『探偵として』なので安心したが、重ねて質問した。

「じゃあ、何で？涼の本当の姿をコナンには見せて、私には見せてくれないの？」

「工藤新一さんは今はかなりの難事件に関わっていて、手を離せないでいるの。だから工藤さんの力を借りるためには、私が隠している秘密を工藤さんに見せて信用される必要があったの。秘密はコナンくんにも見せたわ」

「秘密を私には見せてくれないの？」

「私の秘密を夢子ちゃんに見せて、嫌われちゃうのが怖い。秘密を夢子ちゃんに見せられる勇気が持てたら、必ず見せるから。こんな言い方は卑怯だと思っけど……」

私は自分が可笑しくなった。

涼も私を大切に思っていて、私に嫌われたくないと思っているのが分かったので、今まで私が悩んでいたのが馬鹿馬鹿しくなったのだ。

私は涼を笑顔に向けた。涼も私に笑顔を返してきた。

「涼！体洗ってあげるわよ！！」

涼は何故かうろたえた。

「それは色々とまずいよ……」

「何がまずいの？事務所同期の水谷さんや日高さんと一緒に温泉に行ったことあるでしょ？洗いっこぐらいその時したんじゃないの？」

「愛ちゃんや絵里ちゃんだけじゃなく、どの女の子もしたことないよ！小さい頃にいとこの律子姉ちゃんと一緒にお風呂に入っただよ！」

私は嬉しくなった。

「私とのが涼の『初めて』ってわけね。涼の『初めて』私がもらうわよ」

「夢子ちゃん。止めて……」

抵抗する涼を、私は無理やり洗ってやった。

「やっぱり、涼の肌は見た目綺麗だと思っていたけど、手触りも最高ね！」

「夢子ちゃん。その手つき止めて……」

私が涼の肌を楽しんでいると、コナンが忍び足で浴室を出ていこうとしていた。

「待ちなさい。コナンくん。さっき、きつい態度したお詫びに、あなたも洗ってあげるわ」

「遠慮するよ。夢子姉ちゃん。涼姉ちゃんと夢子姉ちゃんは女同士だから良いけど、僕は男なんだし……」

「七歳の男の子なんて、男の内に入らないわよ。美少女アイドル二人とお風呂に入れるチャンスを逃したら、十年後ぐらいに後悔するわよ」

私は、恥ずかしがる涼とコナンを洗ってやった。

涼は美少女だし、コナンもあらためて見ると可愛い男の子だ。

二人を独占しているようで、私は楽しい時間を過ごした。

俺の名は「工藤新一」十七歳の高校生探偵だ。しかし、ある事情から体が幼児化し、七歳の小学一年生「江戸川コナン」を名乗っている。

桜井さんには大変な目に遭わされた。

蘭もそうだが俺を正真正銘の七歳の男の子だと思っているから、平

気で裸を見せるのだ。

恥ずかしいし、罪悪感で内心モヤモヤする。

とにかく！頭を切り替えて、探偵としての仕事に入ろう。

風呂から出た後、俺は涼と桜井さんとのカレーライスの夕食を終えると、食卓についたまま今日の調査結果について話し始めた。

涼の家には、盗聴器などは仕掛けられていないことは、事前に確認してあるから安心して話せる。

「まずいつも桜井さんを尾行している二人組の男についてだけど…

…」

二人組の男はいつも同じ男たちだった。調べてみると、ある探偵事務所の人間だった。

その探偵事務所は、俺や毛利探偵事務所のように刑事事件に関わることはなく、素行調査や浮気調査をしている普通の探偵事務所だ。

「その探偵事務所が、私を尾行して、私の家に盗聴器を仕掛けたの？」

「そうだよ。夢子姉ちゃん」

「何故、その探偵事務所は夢子ちゃんにそんなことをしているの？」

「探偵事務所が、そうするよう依頼されたからだよ」

涼は疑問を浮かべた表情になった。

「探偵事務所がそんな仕事をするの？尾行だけならともかく、夢子ちゃんの家忍び込んで盗聴器を仕掛けるなんて、完全に犯罪じゃない！」

「順序立てて説明するね。探偵事務所によっては非合法なことをする悪質なところもあるけど、この探偵事務所は本来違法なことはいないところなんだ」

涼の疑問はますます大きくなったようだ。

「それが、何故？」

「この探偵事務所が依頼人から脅されているからだよ」

俺は涼たちに、詳しいことを説明した。

この探偵事務所は、最初に依頼人から桜井さんの尾行と盗聴を依頼された時には断った。

理由はもちろん犯罪になるからだ。

しかし、その後探偵事務所に差出人不明の封書が届いた。

封書の中身は、探偵事務所の間全員の自宅や家族を隠し撮りしたものだ。

探偵事務所は警察に届け出たが、具体的な犯罪が行われたわけではないので警察は動かなかった。

そのすぐ後に、同じデザインの封書に札束と桜井さんへの依頼の手紙が入った物が届いた。

「自分と家族に危害を加えられるのを恐れて、探偵事務所は依頼を受けることにしたんだ。札束はかなりの額だったから、それに目が眩んだところもあるみたいだけど」

「でも、それなら探偵事務所は、なおさら警察に届け出たら良いんじゃないの？」

「涼姉ちゃん。探偵事務所の人が夢子姉ちゃんの家忍び込んで盗聴器を仕掛けてあるところを隠し撮りした動画が、届けられたりもしたんだ。警察に届けたら探偵事務所自身もつぶれちゃう。脅迫でがんじがらめにされているんだ」

「依頼人は誰なの？」

桜井さんが聞いてきた。

「分からない。この探偵事務所も知らないんだ」

「どういうことなの？」

「この探偵事務所に直接依頼人が来たのは最初の一度だけで、その時名乗った名前も住所も偽物だった。夢子姉ちゃんを尾行や盗聴した報告書は郵送することになっているけど、宛先は長期の海外出張に出ている人の家で、今は誰も住んでいない。依頼人は郵便受けを勝手に使って、郵便受けから報告書を抜き取っているらしいんだ」

さらに説明を続けようとしたところ、涼の家の玄関のチャイムが鳴った。

S T A G E ・ 1 1 夢子のキャンディ その3（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

STAGE・12 夢子のキャンディ その4

僕、秋月涼はチャイムが鳴るとすぐに玄関に向かった。

阿笠博士に僕の家の周囲を監視できる監視カメラを設置してもらっており、その映像は玄関の中に設置してあるモニターで見ることができる。

モニターを見ると、夢子ちゃんを尾行している二人組は車の中から動いていない。

玄関の前には、一人の男性と一人の少女がいた。

阿笠博士と灰原哀さんだった。

「は、灰原……、どうしてここへ？」

新一先輩は、家の中に入って来た阿笠博士と灰原さんを見ると、うろたえた。

例えは悪いけど、その様子は、よくドラマなどで見る浮気現場を妻に押さえられた夫のようだった。

灰原さんは新一先輩の質問に答えることなく、僕に視線を向けた。

やはり例えは悪いけど、その視線は、ドラマで妻が夫の浮気相手に向けるような冷たい物だった。

「カレーの匂いがするわね。秋月さん。良かったら、ご馳走しても

「らえるかしら？」

カレーもご飯もまだ余っていたので、僕は二人にカレーライスを出した。

阿笠博士はかなりの空腹だったようで、ガツガツと食べている。

灰原さんも上品な食べ方をしているが、同じくかなりの空腹だったようだ。

「美味しいわ。秋月さんは料理が上手ね」

灰原さんは、僕のカレーを誉めてくれたが、相変わらず僕に向ける視線は冷たいままだ。

何故だろう？灰原さんとはドラマのロケで毛利探偵事務所に行った時に、少し言葉を交わしたぐらいで、冷たい目で見られる覚えがない。

僕が口に出して質問にしたのは、別のことだった。

「お二人とも大分お腹が減っていたようですが、何かあったんですか？」

「なにせ今日は、朝飯、昼飯、晩飯と抜きだったからのう」

阿笠博士が答えた。

「何故？ご飯抜きだったんですか？」

僕の質問に灰原さんが答えた。

「私が秋月さんの家の場所を博士が白状するまで、ご飯を食べさせなかったのよ」

「何で、涼姉ちゃんの家の場所を知りたかったんだ？灰原？」

新一先輩の質問に灰原さんが答えた。

「江戸川コナンくん。あなたに会って、今日、私に秘密でコソコソと調査していたことについて問い質したいからよ。何か、私に知られたくないことについて調査していたんでしょ？」

灰原さんが新一先輩に向ける口調も目つきもキツいものだった。

新一先輩はタジタジになっている。

「何故？そう思うんだ？」

「理由、その一」

灰原さんは、指を一本立てた。

「江戸川くんは、今朝ご飯も食べずに朝早くから、出かけた」

「何で、知ってるんだ？」

「蘭さんから教えてもらったからよ」

「蘭が……、蘭姉ちゃんが、どうして？」

「吉田さんが蘭さんに頼んでいたのよ。江戸川くんが秋月さんの所に出かけたら、メールをしてくださいと、吉田さんまだ江戸川くんが秋月さんに浮気しているんじゃないかと、疑っているみたいね。吉田さんは蘭さんからのメールを私に転送したわけ」

「浮気ってなあ……、俺と涼姉ちゃんは、そんな関係じゃないぞ」

「分かってるわよ。話を戻すけど、私が不審に思ったのは、江戸川くんが出かけた時の様子よ。ここ最近毎日江戸川くんは秋月さんに同行しているし、今朝は蘭さんに『涼姉ちゃんの演技の練習のためしばらく泊まり掛けになる』と言って歩いて出かけたそうだけど、そこがおかしいのよ」

「どこがだ？灰原？」

「それが、理由その二」

灰原さんは、二本目の指を立てた。

「蘭さんも吉田さんも、江戸川くんが歩いて出かけたのを不審に思わなかったみたいだけど、今までは毎日常月さんの専用車が毛利探偵事務所の前まで迎えに来ていたわ。今日に限って迎えが無かったのは、何故かしら？」

「そ、それはだなあ……」

「私の推理を言うわね。秋月さんの専用車が来なかったということ、今日は江戸川くんは秋月さんとは別行動の可能性がある。朝早く出かけたということは、結構遠い場所まで江戸川くんは調査に出

かけた。どう？私の推理合っているかしら？名探偵さん？」

「合ってるよ。灰原」

「そして、私に調査に行くのを知られなくなかったと推理できるのが、理由その三よ」

灰原さんは、三本目の指を立てた。

「江戸川くんは、遠出する必要がある時には、たいてい博士に頼んで車を出してもらうのに、今日はそれをしなかった。博士に車を出してもらうと、私にも遠出するのを知られてしまうわ。私に知られるのを避けたんでしょ？」

「その通りだ」

灰原さんは呆れたような表情になった。

「まったく、普段都合良い時には、私を相棒扱いするくせに、肝心な所は秘密にするなんて、どういっつもりなの？」

新一先輩は、灰原さんに頭を下げた。

「悪かった。この通り謝る。だけど、今日の調査で桜井さんの身に起きている事件は、灰原にも関係があると分かった。これからは全部話す」

「そうして欲しいものね。名探偵江戸川コナンくん」

僕は、新一先輩と灰原さんのやり取りを見ていて、心が温かくなっ

た。

灰原さんが新一先輩に向ける表情も言葉もキツいけど、相手に対する深い信頼が感じられた。

そう言えば、新一先輩と灰原さんは、どういう関係なんだろう？

灰原さんは、新一先輩と同じで体が幼児化しているらしいけど、それ以外は本当の年齢も、灰原哀という名前が本名なのかも知らない。

新一先輩と灰原さんの関係は「友達」よりは深く感じられるし、「恋人」と言うような甘い感じもしない。

二人の關係に一番ふさわしい言葉は、灰原さんが言ったように「相棒」だろう。

二人で協力して難事件に立ち向かうイメージだ。

僕は灰原さんに頭に浮かんだ他の疑問を質問した。

「阿笠博士がお腹を空かせていた理由は分かるけど、灰原さんまでお腹を空かせていたのは、何故なの？」

灰原さんは、僕に相変わらず冷たい視線を向けて答えた。

「博士がお腹を空かせているのに、私だけ食べるわけにはいかないでしょう。朝食抜きにした時に白状してくれれば良かったのに、おかげで私も今まで何も食べれなかったわ」

私は「宮野志保」十八歳。事情があつて七歳の姿になり、「灰原哀」と名乗っている。

秋月涼さんの家の食卓で、私は秋月さんに冷たい視線を向けている。良くない態度なのは、自分でも分かっている。

だけど、どうにも我慢できない。

工藤くんは本当は十七歳の男性だ。それが十五歳の女性アイドルの家に泊まるなんて……、彼には「毛利蘭」という大切な人がいるのに、ある意味裏切りではないだろうか？

まあ。七歳の体では、何もできないのは分かっているけど。

私の隣に座る工藤くんから、ボディソープとシャンプーの匂いがした。

「江戸川くん。この家のお風呂に入ったの？」

私の何気無く口にした言葉に、桜井さんが反応した。

「うん。私と涼とコナンくんの三人でお風呂に入ったわよ。コナンくんの体と頭、私が洗ってあげたわ」

「何をしてるのよ！？江戸川くん！！」

私は大声を張り上げた。

「お、落ち着けよ！灰原！！」

「これが落ち着いていられるわけないでしょ！！女性二人と一緒に風呂に入って、しかも頭と体を洗ってもらうなんて！！自分が子供なのを、そういうふうにご利用するなんて！！」

「まあ。まあ。落ち着いて、哀ちゃん」

桜井さんはニコニコと笑って、私に近づくと子供にするように、私の頭をなでた。

こんなふうに、頭をなでもらうのは何年ぶりだろう？

幼い頃亡くした両親から頭をなでられたことは多分あったのだろうが、記憶は無いし、亡くなった姉からも、私が成長してからは頭をなでられたことは無い。

今、私の親代わりになってくれる阿笠博士は、私が本当は子供でないことを知っているから、こんなふうに頭をなでくれたことは無い。

桜井さんが頭をなでてくれるのは、少し嬉しかった。

だけど、私は桜井さんに冷たい視線を向けた。

「桜井さん！あなたに『哀ちゃん』なんて呼ばれたくないわ！！それは私の親友一人だけに許した特別の呼び名なんだから！！」

私が冷たい視線を向けたのにもかかわらず桜井さんは、相変わらずニコニコしている。

いいえ。むしろ、さっきよりニコニコ笑っている。

「それなら、涼が呼んでいるように『灰原さん』って呼んで良い？」

「それなら、いいわ」

私は、冷たい視線のまま桜井さんに答えた。

「もう。そんな怒った顔しないで、せつかくの美人が台無しよ……、
って言いたいところだけど、怒った顔も美人ね。灰原さんは、今は
美少女で、大人になれば間違いなく美女になるわ。だから、もっと
自分に自信を持った方が良いわよ」

「自信を持つとは、何になのかしら？」

桜井さんは、私と工藤くんを交互に見た。

「灰原さんは、私か涼にコナンくんを取られちゃうと思って、心配
してここに来たんでしょう？」

「なっ!？」

私は桜井さんが、あまりにも的外れなことを言うので、言葉が出な
かった。

「顔を赤くしちゃって、可愛いわね。灰原さん。コナンくんのこと
が好きならば、自分の気持ちに正直になりなさい」

私は桜井さんに反論した。

「私の顔が赤くなっているのは、桜井さんが的外れなこと言うから呆れて興奮したからよ！私は江戸川くんのこと好きなんかじゃ、ないわー！」

「じゃあ、灰原さんはコナンくんを、どう思っているの？」

「どうって……、そう！ただの研究対象として興味あるのよ」

「やっぱり、興味あるんじゃない」

「だから！そういう意味じゃ、ないわー！」

私と桜井さんの言い争い（と言うべきかどうか、分からないが）は、しばらく続いた。

桜井さんの誤解が、どうしても解けないので、私は議論を打ち切った。

工藤くんは、私に桜井さんの身に起きた事件について説明している。

桜井さんを尾行・盗聴している探偵事務所について、工藤くんは話し終えた。

「今日は、もう一つのこと調べたんだ。ここから先は、まだ涼姉ちゃんたちにも話していない」

工藤くんは前置きした。

「毛利探偵事務所で、夢子姉ちゃんをナイフで襲った男だけど……、今は無職だけど、最近まで……」という会社名の健康飲料製造販売会社に勤めていたんだ。夢子姉ちゃん。この会社名を聞いた覚えはない？」

桜井さんは、頭の中の記憶を探る顔になった。

「思い出したわ。インターネットで健康飲料の通販やっている会社ね。私も買って、キャンディの材料に使ったことあるわ」

私は、叫び出しそうになるのを必死になってこらえた。

何故なら、その会社は、私が所属していた「組織」の関連会社だったからだ。

S T A G E ・ 1 2 夢子のキャンディ その4（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

STAGE・13 夢子のキャンディ その5（前書き）

タイトルを「アイドル探偵 秋月涼」から「アイドル探偵 秋月涼 名探偵コナン&アイドルマスターDS 秋月涼」に変更しました。

STAGE・13 夢子のキャンディ その5

俺の名前は「工藤新一」十七歳の高校生探偵だ。

事情があつて七歳の体になってしまい今は「江戸川コナン」を名乗っている。

その事情というのが、灰原の開発した薬「APTX4869」だ。

俺は、怪しい黒づくめの服を着た男二人組（後にコードネーム『ジン』『ウォッカ』と分かった）を尾行したところ、ヤツらの犯行現場を目撃してしまった。

口封じとして、この薬を毒薬として謎の「黒の組織」の一員であるジンに俺は飲まされてしまい体が幼児化してしまったのだ。

ジンとしては「薬物反応が残らずに死に至る毒薬」として、この薬を使ったのだったが、ヤツの知らなかった副作用として「まれに体が幼児化する」というのがあったのだ。

そのため、俺は命は助かり組織の目から逃れるために「江戸川コナン」として生活している。

俺は黒の組織を調べる内に、ヤツらが様々な犯罪を行ってきたことを知った。

俺は探偵としてヤツらの犯罪を暴いて、組織の正体を白日の下にさらしたい。

俺個人としても組織からAPT×4869の完全なデータを手に入れられれば解毒剤が作れるから、「工藤新一」の体に戻って、ずっと騙している形になっている「毛利蘭」に真実を話したい。

だが、黒の組織は巨大で謎が多く、なかなか正体に近づけないでいた。

今回の涼から依頼を受けた桜井さんの身の回りで起きている事件が、たまたま「黒の組織」と関わっていると分かったのは、俺にとっては幸運だった。

「何が！幸運よ！あなたは！どれだけ危険なことをしているのか、分かっているの？」

灰原が俺をにらんだ。

今、俺と灰原は二人きりで涼の両親の寝室にいる。

灰原が俺と二人きりで話がしたいと言ったので、長期出張中で留守にしている両親の寝室を涼が貸してくれたのだ。

「灰原、立ち話も何だから、とにかく座ろう」

俺はベッドに腰掛けた。

灰原も俺の隣に座った。

俺は、これまでの黒の組織に関わる調査について灰原に説明した。

灰原が組織を抜けた時に、灰原が所属していた組織の研究所は、組

組織が秘密を守るため自ら火をつけて、火事で全焼してしまった。

灰原の言うところでは「私の立ち寄った組織関連の場所はおそらく全て潰されているわね」とのことだったが、一応灰原にリストにしももらっていた。

小学一年生として小学校に通いながら、時間の合間にリストの場所を一つ一つ調べていた。

ほとんどの場所は、灰原が組織から抜けるのと同時期に火事で全焼するなどして無くなっていた。

この方面からの調査をほとんど俺は諦めかけていた。

しかし、桜井さんを毛利探偵事務所で襲った男の経歴を調べたところ、男はリストにある健康飲料製造販売会社に以前は勤めていたことが分かった。

今日、リストにある住所に行ってみたところ、その会社は現在も堂々と営業していたのだ。

「灰原、他の所は全部潰されているのに、この健康飲料会社だけ潰されていない。理由に心当たりはあるか？」

灰原は考え込んだ表情になった。

「そうね。そういうことだったのね」

灰原は自分が納得するようにうなづくと、俺と視線を合わせた。

「工藤くん。よく聞いてね。全部ではないけど、組織について私が知っていることを話すから……」

灰原は、そう前置きすると話始めた。

「まず、私が所属していた研究所だけど、一般の会社で言えば社長直属の研究所のような物なのよ。『APT-X4869』の開発は組織の最重要課題で、最終目標でもあるから」

「ところで『APT-X4869』って何のための薬なんだ？初めて会った時に『毒なんか、作っているつもり無かった』と言ってたけど？」

「そのことは、今回の事件とは関係ないわ」

灰原は厳しい表情になって、俺の質問を拒絶した。

灰原は俺に隠している組織についての情報が結構あるようなのだが、話してくれたことはない。

この表情になったら、灰原は頑として答えてくれないのは分かっているんで、俺は話の続きを促した。

「そして、今回の健康飲料会社だけど、一般の会社に例えれば本社の下請けの子会社のような物なのよ。偽装と資金調達を兼ねて表向きは本当に会社を営業しているわ。裏では『APT-X4869』とは別の薬の研究が進められているわ」

「健康飲料会社が潰されていない理由は、何なんだ？」

「それは、これから話すわ。私とその健康飲料会社に行ったことがあるのは、一度だけなの」

「一度だけ？」

「そう、一度だけ、今思うと変だったわ。『A P T X 4 8 6 9』のデータを私が直接その会社に渡すように命令されたのだけど、いつも私に命令する人とは別の人だったし、私の研究所の他の人間にデータを渡したことを言わないように口止めされたわ」

俺は推測を口に出した。

「つまり健康飲料会社は組織の『本社の社長』に無断で、灰原からデータを手に入れたということだったのか？」

「そうとしか考えられないわ。『本社』は私が健康飲料会社に行ったことがあるのを知らないから、健康飲料会社は潰されていないのよ」

続けて灰原は、健康飲料会社が開発していた薬の説明を始めた。

「そこで秘かに開発されていた薬のコードネームは『P R O 8 7 6』

……」

俺は思わず叫んでいた。

「P R O 8 7 6 だつて!？」

P R O 8 7 6、この言葉から連想されるのは当然、涼が所属する芸

能事務所 876 プロダクションだ。

「涼の事務所とその会社には、何か関係があるのか？」

俺が真剣に質問しているのに対して、灰原は過去の呆れた記憶を思い出す表情になった。

灰原は軽く首を横に振った。

「そうじゃないわ。この会社の薬の開発責任者が、かなりのアイドルマニアだったのよ。好きなアイドルにちなんでコードネームを付けたのよ。机の上には私物のアイドルグッズが山盛りになっていたのを覚えているわ。他にも何のための薬かは、私も知らないけれど『PRO765』というのもあったわ」

俺は芸能界に詳しくないが、765 プロダクションという芸能事務所があることは知っている。

「話が少し脱線したから、戻すわね。『PRO876』は……」

灰原が俺にした説明によると、実験用のAPT-X4869を投薬したマウスにまれに奇妙な現象が発生することがあった。

その「奇妙な現象」を人間に発生させるために研究されたのが、PRO876なのだ。

俺は納得した。

「なるほど、涼の体に『奇妙な現象』が起きているのはそれでか、桜井さんから貰ったキャンディを食べたら、涼は体が変化したそう

だから」

灰原はうなづいて、俺の言葉を補足した。

「ええ。桜井さんは通販でこの会社から健康飲料を買ってキャンデイの材料に使ったと言ってたから、何かのミスでPRO876の成分が表向き販売している健康飲料に混入したのね」

「健康飲料会社の元社員が、ナイフで桜井さんを襲ったのは、何故だ？」

俺の口にした疑問に、灰原が反応した。

「当たり前じゃない。PRO876を桜井さんが飲んだかどうか確かめるためには、ナイフで刺すのが一番じゃない」

灰原の言葉の意味を俺はこの時は「ナイフで桜井さんの服を切り裂いて裸にして、体の性別が変わったか見る」と解釈した。

「桜井さんの裸を確かめたいのならば、着替えを隠し撮りするぐらいで、いいんじゃないか？」

灰原は顔を赤くして怒った。

「何で？桜井さんの裸の話になるのよ！？そう言えば桜井さんと秋月さんと一緒にお風呂に入ったそうね！十七歳の男がそんなことしても良いと思っっているの！？」

「仕方ないだろ。桜井さんは俺を真正正銘七歳の子供だと思っているんだし、それに桜井さんとはともかく、涼と俺と一緒に風呂に入っ

たつて問題無いだろ」

「何で？秋月さんとは問題無いのよ」

「涼は俺の正体知ってるし」

「工藤くん。あなたが『工藤新一』だつてこと秋月さんに教えたの？」

「涼の方が、俺の正体を見抜いたんだ。涼は裸になって、自分の人に知られるわけにはいかない大事な秘密を見せてまで『工藤新一』に桜井さんの事件の依頼をしたんだ。俺は探偵として、男として、涼の気持ちに答えたいと思つたんだ」

灰原は何故か激しいショックを受けたような顔になった。

「そう言えば、さつきから工藤くんは秋月さんのこと呼び捨てにしているけど、そんなに深い仲なの？」

「人目がある時は、『涼姉ちゃん』『コナンくん』って呼び合っているが、二人きりの時は、『涼』『新一先輩』って呼び合っているよ」

また何故か分からないが、灰原は重大な事を尋ねる表情になった。

「工藤くんは、秋月さんとどんな関係でいたいと思っているの？」

「涼とは一生付き合っていきたいと思っているよ」

そつだ。俺は涼とは一生「男友達」として付き合っていきたい。

「男友達」として一緒にいて、こんなに気持ちの良い男は他にいない。

「裏切り者！！」

灰原が、いきなり俺の頬を平手打ちにした。

俺は不意を突かれて、背中からベッドに倒れた。

「何すんだよ！？灰原！」

灰原は、ベッドに仰向けになっている俺に覆いかぶさった。

顔は今にも泣きそうに……、いや、灰原は本当に涙を流していた。

「何だ？何で？泣くんだ」

蘭も灰原も、女の涙は苦手だ。

灰原は涙声になっていた。

「だってそうじゃない。あなたには蘭さんという人がいるのに、他の女性に気持ちに移るなんて……」

ここで、俺は灰原が何を誤解しているのか分かった。

「他の女性？博士から聞いてないのか？『涼』は真正正銘の『男』だぞ」

俺は涼が「男」だと分かってからの今までの細かい経緯を灰原に話した。

灰原はホッとした表情になった。

「PRO876に男性の体が女性化するなんて副作用があつたなんて……」

俺は灰原の言葉に反応した。

「副作用？PRO876は性転換を目的にした薬じゃないのか？」

灰原は首を横に振った。

「違うわ。……のための薬よ」

俺は灰原から薬の本当の目的を聞いて、疑問を口にした。

「それなら、何で？涼は女体化したんだ？」

「分からないわ。秋月さん個人の体質からくるモノかもしれないし……秋月さんの体を調べる必要があるわね」

「桜井さんも健康飲料を飲んでいるはずだぞ、だけど体に異常があるような様子は無かった」

「それも調べる必要があるわね」

話している内に、俺は自分がベッドに仰向けになつたままで、灰原も俺に覆いかぶさつたままにいるのに気づいた。

俺は自分の顔が赤くなるのを感じた。

灰原も顔を赤くして、慌てて俺から少し離れた。

「寝室で、私と二人きりになるなんて、私に何をしようとしたのかしら？」

灰原はいつものように、俺をからかう顔と口調になった。

「お互い七歳の体なんだから、何もしようがないだろ！」

「それなら元の体に戻ったら何かする気にいるわけね？怖いわね。気をつけなくちゃ」

「灰原、お前なあ……」

灰原本人の口からハッキリと聞いたことはないが、灰原の本当の年齢は俺の一つ上の十八歳だ。

たまに俺に、年上の女性が年下の男をからかうような態度をするところがある。

だけど、俺はそれほど不愉快には感じてはいない。

寝室のドアが外から激しくノックされた。

「灰原さん！出て来て！涼が大変なの！」

桜井さんの焦っている声だった。

S T A G E ・ 1 3 夢子のキャンディ その5（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・14 夢子のキャンディ その6

私、桜井夢子は涼の家の居間で阿笠博士と二人でお喋りしていた。

涼は台所で夕食の後片付けをしている。

「灰原さんは、阿笠博士のお孫さんなんですか？」

阿笠博士は、私の質問に苦笑いした。

「わしは独身じゃよ。哀くんは遠い親戚での。訳があつて、わしが預かっているのじゃよ」

「灰原さんのご両親はどうされたんですか？」

私の何気なくした質問に、阿笠博士の表情は暗くなった。

「哀くんのご両親は何年も前に亡くなつての……、ただ一人の肉親だった姉も最近……、桜井さん、哀くんにはそのことは触れないでもらえるかのう？」

「分かりました」

その時、台所の方から何か大きな物が倒れる音がした。

私が台所に駆け付けると、涼が床に倒れていた。

「涼！どうしたの？涼！？」

「か、体が熱い……」

涼は昼間テレビ局で倒れた時と同じ様子だ。

「涼、待ってて！今、救急車呼ぶから！」

私がケータイで電話を掛けようとすると、阿笠博士が止めた。

「待つんじゃない！哀くんを呼んだ方が良い！」

私は灰原さんと呼ぶために、涼の両親の寝室に急いで向かった。

冷静に考えると、この状況で小学生一年生の女の子を呼ぶのは変なのだけど、涼が心配で、私は阿笠博士の言葉に疑問無しで反射的に従っていた。

左足に妙な違和感があったが、それも気にならなかった。

「どうなの？涼の容態は？」

私は、涼の手首を取って脈を計ったり、胸に耳を当てて心音を聞いたりしている灰原さんに尋ねた。

普通そんな光景を見たら、「子どもがお医者さんごっこをしている」ようにしか見えないだろうが、私には灰原さんがその幼い体なのに本物の医者のように見えた。

「大丈夫よ。桜井さん。秋月さんは一時的に脈拍や心拍が激しくなったけど、今は正常になったわ。もう心配はいらないわ」

私はホッとした。

「夢子ちゃん……」

意識を取り戻した涼が朦朧とした口調で、私に話し掛けてきた。

「汗が気持ち悪い……」

私は涼から着替えの閉まってある場所を聞いて、取りに行った。

「ハイ、ハイ、女性が着替えるのよ。男二人は外に出て！」

灰原さんが阿笠博士とコナンくん部屋から出るよう促した。

私は着替えを持って来ると、まだ体が上手く動かないらしい涼の服を脱がせた。

あれ！？上半身裸になった涼の姿が変だ！

一緒にお風呂に入った時は、涼の体は綺麗な肌をしていたし胸の大きさも形も立派な物だったのに、今は綺麗な肌はそのままだけど、全く胸が無い。

まるで男の人の胸だ。

私は、涼の下半身も脱がせた。

わっ！？これは……、これは……。

私は実物を見たことはないけど、涼の下半身に付いているこれが何

かは分かる。

その……、具体的な名前を口にするのは恥ずかしいけど、男性だけが持つ物だ。涼とお風呂に入った時は、涼の下半身にこんな物は付いていなかった。

でも今は、裸になった涼の体は、男の体にしか見えなかった。

私の左足の裏の違和感はまだ続いていたが、それより衝撃的なことを見てしまったので、そちらは全く気にならなかった。

僕、秋月涼は、遂にこの時が来たと思った。

夢子ちゃんに、僕の男の体を見られてしまったのだ。

「涼、これは、どういうことなの？」

「それは……」

服を着た僕は、説明しようと口を開いた。

「夢子姉ちゃん。僕から説明するね」

新一先輩が説明を始めた。

新一先輩は「江戸川コナンの親戚の高校生探偵工藤新一が調査をし

ている犯罪組織」について話を始めた。

その犯罪組織が作った薬が、夢子ちゃんが通販で買った健康飲料に混入してしまい。その健康飲料を材料に使ったキャンディを僕が食べたから、僕の体の性別が変化したことを新一先輩は話した。

新一先輩は何度か、灰原さんの方を見るので、僕らに話す内容を確認しているようだ。

灰原さんは無表情のままで、何も口を挟まなかった。

「私のキャンディのせいで、涼の体が性転換したの？でも、私もこのキャンディ食べたけど、体の変化は無いわよ？」

「夢子姉ちゃん。本来この薬は性転換のための物じゃ、ないんだ」

「それなら、何のための薬なのよ？」

「夢子姉ちゃん。左足痛くない？」

新一先輩は、唐突な感じで夢子ちゃんに尋ねた。

「別に痛くないわよ。さつきから違和感はあるけど……」

夢子ちゃんは自分の左足を見た。

「えっ！？何よ！？これ！！」

僕も夢子ちゃんの左足を見て驚いた。

割れたガラスのコップの破片が突き刺さっているのだ。

僕が台所で倒れた時に、コップが床に落ちて割れたのだろう。

「夢子ちゃん。痛くないの？」

夢子ちゃんは、僕の質問にますます驚いた。

「痛くも痒くも無いわ！血も出ていないし……、どういふことなの？」

灰原さんが無言のまま夢子ちゃんに近づいた。そしてコップの破片を引き抜いた。

夢子ちゃんの左足の傷は、破片を引き抜くとたちまち塞がって行った。

「これが薬の本来の効果よ」

灰原さんは、冷静な口調で説明した。

「超回復薬とでも言うべき物よ。拳銃の弾丸程度ならば、一発で致命傷にならない限り、すぐに回復するわ」

僕、秋月涼は、今自分の部屋のベッドの上にいる。

夜も遅いし、僕も夢子ちゃんも明日は朝早くから仕事があるので、残りの話は明日以降にしたのだ。

それで、僕も自室で寝ようとしたのだけど……。

夢子ちゃんが「涼。一緒に寝ましょう」と、僕の部屋に来たのだ。

「夢子ちゃんには、客間を用意してあるから、そっちで……」

「涼。やっぱり私のこと邪魔に思ってる？」

夢子ちゃんが泣きそうな表情になった。

僕は慌てて否定した。

「邪魔だなんて！夢子ちゃんのことを、そんなふうに思ったこと一度も無いよ！」

「なら、どうして一緒に寝てくれないの？」

「僕は『男』だから……」

「分かってるわ。私のキャンディのせいで、涼は『男の体』になっちゃたんでしょ？安心して！私はちゃんと涼を『女の子』あつかいするから！」

あれ？……、何だか、話が変わだぞ。

そうか！！僕が『本当は男』だということを夢子ちゃんには、まだ話していなかった。

夢子ちゃんは、僕が「薬」で「本当の女の体」から「男の体」に「性転換」したと思っているんだ！

でも、色々とあつて精神的に弱っている夢子ちゃんに、僕が「本当は男」だと言うのはショックが大きいかもしれない。

仕方ない。これまで通り、僕が「女の子」だという嘘をつき続けることにしよう。

「あの、夢子ちゃん。心はともかく、今私は体は『男』なのだから、『女』の夢子ちゃんと一緒に寝るのは、色々と問題が……」

「涼、私はあなたに罪滅ぼしがしたいのよ」

「罪滅ぼし？」

「そう。私のキャンディのせいで、涼の体はそんなことになっちゃたんだし……」

僕は強く否定した。

「夢子ちゃんに責任は無いよ！悪いのは全部薬を作った犯罪組織だよ！」

「そうかもしれないけど、私の気が済まないのよ。私はこれから涼の体が男になっていることが、他の人にばれないようにサポートするわ。お願いだから、涼のそばに居させて……」

結局、僕は夢子ちゃんに押し切られて、一つのベッドで一緒に寝る

ことになった。

僕が「床で寝る」と言ったのだけど、夢子ちゃんが「それなら、私が床で寝るわ」と言ったので、こういうことになった。

ベッドで横になると夢子ちゃんは、すぐに寝てしまった。

無理もない。今日は色々あったから、精神的にも肉体的にも疲れていたのだろう。

僕も疲れているから、眠りたいのだけど……、興奮して寝つけないでいる。

一つのベッドの中で、女の子と一緒に寝るのは、僕は初めてだ。

愛ちゃん、絵里ちゃんと一つのテントの中で寝たことはあるけど、寝床は別だったし……。

夢子ちゃんの寝顔、初めて見るけど、可愛いなあ。

お風呂で夢子ちゃんの裸の胸見ちゃったけど、やっぱり愛ちゃんたちより大きくて……。

な、何を考えてるんだ僕は！今、秋月涼は女の子なんだ！女同士の友達の夢子ちゃんに、そんなやましいこと考えちゃいけない！

平常心でいよう。平常心……、平常心……。

僕も疲れていたので、自分でも気づかないうちにいつの間にか寝てしまっていた。

次の日の朝、目が覚めると、顔に何か柔らかい物が押しつけられているのに気づいた。

これは何だろう？枕じゃないよね？弾力があって、手で触ると気持ちいい……。

僕が少し寝惚けたまま顔の前にある物を手で触っていると、それが何かにようやく気づいた。

夢子ちゃんの胸だったのだ！

夢子ちゃんは、僕に抱き枕にするように抱きついている。

「涼……」

夢子ちゃんの寝言だ。

「大好きよ……」

僕は興奮してしまった。

もちろん。この言葉は男の僕に対する物ではなく、夢子ちゃんの女友達の女性アイドル秋月涼に対する物だと分かっている。

平常心だ！平常心でいなきゃ！

夢子ちゃんが目が覚めるまで、この状況は続いた。

僕たちは朝食を済ませると、僕、夢子ちゃん、新一先輩、灰原さんの四人で、僕の専用車で876プロに向かった。

今日のドラマ「アイドル探偵 秋月涼」の撮影は、876プロを舞台に行われる。

阿笠博士は、開発中の発明品があるので家に戻った。

灰原さんも一緒に来たのは、新一先輩が無茶をしないための「監視役」だそうだ。

新一先輩は、灰原さんを少し苦手にしているようだ。

もちろん。それは嫌っているという意味では無くて、僕と従姉の律子姉ちゃんの関係に近い感じがする。

僕は律子姉ちゃんのことは好きだけど、精神的にどうしても勝てない所があるから、それと似たような物だろう。

「おはよーございますー！涼さん！」

「おはようございます？涼さん」

876プロの事務所の中に入ると、僕の同期のアイドル日高愛ちゃんと水谷絵里ちゃんがすでに来ていた。

「おはよう。愛ちゃん。絵里ちゃん。今日はよろしくね」

僕は二人に挨拶を返した。

今日のドラマの撮影には、愛ちゃんと絵里ちゃんも参加する。

「あーっ！」

愛ちゃんがいつものように大声を出して、いきなり駆け出した。

新一先輩に愛ちゃんは抱きついた。

「この男の子、可愛いですね！あっ！？でも今日の撮影、子役の出演ありましたっけ？」

この後、新一先輩に災難が襲いかかることになるとは、僕は予想できなかった。

S T A G E ・ 1 4 夢子のキャンディ その6（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・15 芸能事務所876プロにて その1

俺の名前は「工藤新一」、今は理由があつて「江戸川コナン」を名乗っている。

今日は、涼と一緒に876プロに来ているのだが……。

「わーっ！この女の子も、お人形みたいに可愛いですね！」

日高愛さんが、俺の次に灰原に抱きついた。

「メガネ男子は、萌え？」

水谷絵里さんが、俺を見て感想を言った。

俺は水谷さんの膝の上に乗せられている。

水谷さんは両腕で俺を抱き締めている。

蘭は、よく俺に小さな子どもにするように（俺の外見は小さな子どもなのだから仕方ないが）こういうことをするが、初対面の俺より年下の十五歳の女の子に同じことをされるのは恥ずかしくて、自分の顔が赤くなった。

「赤くなってる？可愛い？」

水谷さんが俺の顔を覗き込んだ。

俺はますます恥ずかしくなった。

涼は俺と灰原のことを「知り合いの子どもで、今日は撮影の見学がしたいと言ったので連れてきた」と説明している。

俺たちが今いるのは876プロの会議室で、俺・灰原・涼・桜井さん・日高愛さん・水谷絵里さんの六人が部屋の中にいる。

会議室のドアが外から空いて、女の人が一人入って来た。

二十歳代後半と思われる髪の長い女性だ。

水谷絵里さんのブログで画像を見たことがある。

今は水谷さんを担当しているフリーのプロデューサー尾崎玲子さんだ。

「絵里に、他のみんな、聞いて、他の出演者の到着が遅れているそうだから、しばらくは待機で……」

尾崎さんは、そう言いながら部屋の中に入って来たが、俺の方に目を向けると何故か深い精神的ショックを受けたような表情になった。

「え、絵里……?」

尾崎さんは、あえぐように声を出した。

「尾崎さん?何?」

「あなた男の人のこと苦手じゃ、なかった?」

「うん……。昔ほどじゃないけど、今も苦手?」

尾崎さんは俺に右手の人差し指を突き付けた。

「それなら、何で!? そのメガネの男の子を膝の上に乗せて、抱き締めたりしているのよ!？」

興奮して声を上げる尾崎さんに対して、水谷さんはマイペースの口調で答えた。

「小さな子どもなら平気? むしろ、可愛い?」

「そ、そうよね。私ったら何を興奮しているのかしら。相手は小さな子どもよね」

尾崎さんは、取り繕うように冷静な態度になった。

だが俺に対しては、にらむような目を向けた。

その目は憎んでいると言うより、俺のことを羨ましく思っている目だった。

何だろう? 俺の何が羨ましいのだろうか?

その疑問が解ける前に、ドアの外から声がした。

「センパイイ! センパイイ! アタシ、ただ今参上デス!」

部屋に入って来たのは、本当の俺と同じくらいの年齢に見える女の子だ。

金髪ツインテールにゴスロリの服を着ていて、一度見たら忘れそうにない。

この女の子も水谷さんのブログで画像を見たことがある。

水谷さんの友達で、ネットアイドルのサイネリアさんだ。

後から聞いたが、サイネリアさんは水谷さんより年上の十八歳だそうだが、水谷さんのことは「センパイ」と呼ぶそうだ。

サイネリアさんも尾崎さんと同じく俺を見たときに、深い精神的ショックを受けたようだった。

「センパイ！アタシ知らなかったデス！センパイが半ズボンのシヨタが好みだったなんて！」

サイネリアさんが興奮して声を上げるのに対して、水谷さんはマイペースの口調で答えた。

「この子、メガネも似合ってる？メガネ男子？」

「そうですね。メガネ似合ってますね。……って、そうじゃなくて！！膝の上に乗せるなんて、アタシにもしてくれしたことないじゃないですか！？このシヨタメガネ！アタシと交代しろ！」

サイネリアさんは、俺を無理矢理水谷さんの膝の上から退けようとした。

「ちょっと、ちょっと！鈴木さん！」

尾崎さんが割り込んできた。

これも、後から聞いたがサイネリアさんの本名は「鈴木彩音」だそう。ただし、本人は本名で呼ばれることを嫌っている。

「止めなさい！小さな子どもに、何をしているのよ」

「アタシを鈴木って呼ぶな！このロン毛！」

「鈴木さん。今日はあなたは『絵里のただの知り合い』としてドラマに出ることになっているのだから、おとなしくしていなさい」

「誰が『ただの知り合い』だ！このロン毛！『センプイの一番の親友』として出るんデス！」

「とにかく！声を荒げるのは止めなさい！小さい子どもの前で教育上良くないでしょ！」

「ふーん。ロン毛。余裕のある発言しているけど、アタシ分かっているのヨ？」

「何が、分かっているというの？鈴木さん」

サイネリアさんは、右手の人差し指を俺に突き付けた。

「ロン毛も、このショタメガネみたいに、センプイの膝の上に乗せてもらって、センプイの両腕で抱き締めて欲しいと、思っているんデシヨ？」

「なっ！？」

尾崎さんは、凶星を指された顔になった。

「ヤッパリ！思った通りデスネ！アラサーのクセに、何を考えているのヨ！」

「誰が、アラサーよ！？三十歳までは、まだ少しあるわよ！」

「それをアラサーって言うんデス！」

尾崎さんとサイネリアさんの二人が何故言い争っているのか、いまいち分らないが、俺が水谷さんの膝の上にいるのが原因のようなので、俺は水谷さんから離れることにした。

「あっ……！？」

俺が水谷さんから離れようとすると、水谷さんは寂しそうな声を出した。

その途端、尾崎さんとサイネリアさんは言い争いを止めて、俺をにらみつけた。

「ちよつと！シヨタメガネ！センパイを寂しがらせるようなコト、するんじゃないわヨ！」

「そうよ！メガネくん！絵里を悲しませるようなことをしたら、子どもでも許さないわよ！」

俺が蘭を怒らせてしまった時もそうだが、怒った女性を鎮める方法

は今だに分からない。

俺は助けを求めて、周囲を見た。

日高愛さんにヌイグルミのように抱き締められている灰原は、いつものように「あら、あら、大変ね。一人でがんばってね」という表情で俺を見ているだけだし、涼を見ると「すいません！新一先輩！僕の力では、どうしようもありません」という感じで、すまなそうな表情をしていた。

俺がどうしたら良いのか分らないでいると、会議室のドアが開いて三人が入って来た。

三人は意外な人物だった。

蘭に歩美ちゃん。そして小五郎のおっちゃんだった。

私の名前は「宮野志保」。表向きは「灰原哀」を名乗っている。

吉田さんが少し怒った顔で、私に近づいて来た。

「哀ちゃん。誤解しないで！『抜け駆けされた』なんて怒っていないから！」

私は、吉田さんの言葉の意味が分からなかった。

「抜け駆けって、何なの？」

「とぼけないで！哀ちゃん！博士から聞いたよ！昨日コナンさんと一緒に秋月さんの家に泊まったんでしょ？」

「ええ。その通りよ」

「やっぱり！哀ちゃん！コナンくんのこと気にしているんじゃない！」

吉田さんが何を怒っているのか、ようやく分かった。

確かに私は、工藤くんのことを気にしている。しかし、吉田さんが思っているのとは、まったく別の意味でだ。

でも、そのことを正直に話すわけにはいけないので、私は話題を変えることにした。

「吉田さんが、ここにきた理由は分かるけど、蘭さんと毛利探偵は何故来たの？」

「うん。博士から哀ちゃんたちが876プロに行っているって聞いて……」

確かに、私は今朝秋月さんの家を出る時に、どこに行くかを博士にメールしておいた。

「……博士に車で、ここに連れ行ってもらおうと思ったんだけど、博士は以前の発明品でクレームが来たとかで、そっちに行っちゃって……」

もう。博士つたら！同居人としては、また家の家計が心配になるわ。

「…… あたしのパパとママは出掛けちゃってるし、車で連れて行ってくれそうな大人は、毛利おじさんしかいなかったの」

「よく、毛利探偵が、吉田さんの頼みを引き受けてくれたわね？」

そう。毛利探偵は、どこからと言うと面倒くさがりだ。子どもが頼みごとをしても、断るのがほとんどだ。

「うん。最初は断られたけど、876プロに行くって言ったら、引き受けてくれたわ。毛利おじさんが大ファンの女性アイドルがいるかもしれないからだって、蘭お姉さんは、その女性アイドルに毛利おじさんが浮気しないように監視するために来たの」

なるほど、それで毛利探偵がパリッとしたスーツを着て、花束を持っている理由が分かった。

その毛利探偵が、私の方に向かって歩いて来た。

正確には、私をヌイグルミのように抱き締めている日高愛さんに向かって歩いて来た。

「初めまして、日高愛さん。私は探偵の毛利小五郎です」

毛利探偵は、初対面の女性にすることがあるキザな顔と声になった。

私は意外に思った。

毛利探偵は沖野ヨーコの大ファンだから、十三歳の日高愛さんは好みからはずれると思ったのだ。

「わーっ！有名な眠りの小五郎に会えて嬉しいです！」

愛さんは、元気よく大きな声を出した。

毛利探偵はキョロキョロと周りを見た。

「ところで、お母さまの日高舞さんは今日は来ておられないのですか？」

私は納得した。毛利探偵は日高舞が目当てで来たのだ。

「そうですか……、毛利探偵はママのファンだったんですか……」

愛さんの声から元気が無くなった。

芸能ニュースには興味の無い私も日高舞・愛親子のことは知っている。

愛さんは親子で比べられてしまうので、いろいろと嫌な思いもしているようだ。

毛利探偵は、そんな愛さんの気持ちに気づくことなく話を続けた。

「はい！一度引退される前も大ファンでしたが、今回復帰されますます大ファンになりました！」

「そうですか……」

愛さんの声から、ますます元気が無くなった。

私は毛利探偵を蹴り飛ばしたくなった。

まったく！女の気持ちに無神経なんだから！そんなんだから、奥さんに別居されるのよ！

その時、外で何かがぶつかる音がした。

そして、この会議室に早足で向かって来る足音と、二人の女性の会話が聞こえた。

「舞さん。車を電柱にぶつけて壊しちゃいましたよ。どうするんですか？」

「まなみん。ちょっと、アクセルを強く踏んだだけで、電柱にぶつかっちゃう車の方が悪いのよ」

「だから、舞さんが運転するの反対だったんです！」

「仕方ないじゃない。まなみんの運転じゃ、安全運転過ぎて、次の仕事に遅れそうだったんだから、二人とも無傷だったんだから、何も問題は無いじゃない」

「問題大有りですよ！」『日高舞が運転した車が交通事故』なんて、スキャンダルですよ！」

「それは、いつものように、上手く処理してね。まなみん」

会議室のドアが外から開いた。

「スーパーアイドル日高舞ちゃん。ドラマ撮影のために、ただ今参上です」

私は驚いた。普通、自分で自分のことを「スーパーアイドル」なんて言ったら、ギャグにしかないだろう。

しかし、日高舞さんには「スーパーアイドル」という言葉がふさわしい。

光輝いている人とは、こういう人のことを言うのだろう。

だけど、私は次の日高舞さんの行動に、もっと驚かされることになる。

「あら？」

舞さんが工藤くんを見た。

「工藤新一くんじゃない？久しぶり、元気だった？」

舞さんは、工藤くんの本名を口にしたのだ。

S T A G E ・ 1 5 芸能事務所 876 プロにて その 1（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・16 芸能事務所876プロにて その2

俺の名前は「工藤新一」。今は表向きは「江戸川コナン」を名乗っている。

俺は、一瞬呆然としてしまった。

日高舞さんが、小学生一年生の姿をしている俺に向かって、俺の本名である「工藤新一」と呼んだからだ。

俺が無言でいるのに、舞さんは少し不思議そうに俺の顔を見ながら、さらに声をかけて来た。

「どうしたの？有希子の息子の新一くんでしょ？十三年以上前、私が一度引退する前に会ったことあるんだけど？」

思い出した！

俺の母親、工藤有希子は元女優で、弱冠十九歳にして数々の芸能界の賞を受賞した伝説の大女優だった。

しかし、当時若手小説家だった工藤優作と大恋愛の末に結婚、あっさり二十歳で芸能界を引退した。

そして二人の間に生まれたのが、俺と言うわけだ。

三年間までは米花町の家で両親と俺は住んでいたが、今は父さんと母さんはアメリカのロサンゼルスで暮らしている。

日高舞さんが芸能界でデビューしたのが、母さんが引退した後だったので、二人が芸能界で一緒に仕事をしたことは無い。

しかし、二人の間に面識はある。

父さんの小説を原作にしたテレビドラマの主題歌を日高舞さんが歌ったのが切っ掛けで、母さんと舞さんは知り合った。

俺が四歳ぐらいの時のことなので、記憶がいまいちはっきりしないが、二人は友達付き合いをしていて、俺も母さんに連れられて舞さんに会ったことがあるのは確かだ。

どうするか？どうやって、この場を誤魔化すか？

考え込んで、黙り込んでいる俺に、舞さんは話を続けた。

「懐かしいわね。私が愛を生んで子育てに忙しくなってから、有希子と会わなくなっちゃったものね。有希子がロスに引っ越しちゃってからは、なおさらね。でも、たまに電話はしているのよ。有希子は高校生の新一くんが日本で一人で生活しているのを、けっこう心配して……、あれ？」

舞さんは疑問の表情になって、俺の頭に右手を置いた。

「新一くん？今は高校生のはずよね？有希子に画像見せてもらったけど、けっこう背の高いイケメンの……、それなのに、まるで小学生みたいじゃない。どうしたの？変な薬でも飲んで、体が縮んじやったの？」

舞さんは当てずっぽうに言ってるだけだろうが、真実を言い当てて

いるので、俺は内心で冷や汗をかいた。

俺がどうしたら良いのか分からないでいると、意外な所から助けが来た。

小五郎のおっちゃんだった。

「お久しぶりです。日高舞さん。探偵の毛利小五郎です。十年以上前に一度お会いしているのですが、覚えておいででしょうか？」

おっちゃんは、いつものように美女に会った時のキザな口調と顔つきになった。

「初めまして、日高舞さん。毛利小五郎の『娘』の毛利蘭です」

蘭もいつものように、おっちゃんの浮気防止のために『娘』を強調した自己紹介をした。

「蘭ちゃん、だったわね？初めましてじゃないわよ。有希子の紹介で、蘭ちゃんをご両親の三人家族に会ったことあるのよ」

「すみません。私、全然覚えてなくて……」

「覚えていなくても無理は無いわ。あの時、蘭ちゃんは四歳になるかならないくらいだったもの。それより、一つ聞きたいことがあるんだけど……」

舞さんは、俺に視線を戻した。

「新一くん。どうしちゃったの？こんなに体が縮んじゃって？」

蘭は「江戸川コナン」についての説明を始めた。

「江戸川コナン」は「工藤新一」の遠い親戚で、今は両親は仕事の都合でアメリカに行っており、蘭の家で預かっている。

「ふーん。そうなの。でも、親戚だからと言っても、コナンくん。新一くんの小さい頃に似すぎてない？」

「私も小さい頃の新一の写真とコナンくんがソックリだと分かったときは、ビックリしました。新一とコナンくんが同一人物じゃないか？と疑ったこともありましたが、有希子さんの口から『コナンくんは遠い親戚』だと直接聞きました」

「有希子がねえ……。でも、私は有希子から『江戸川』なんて珍しい名字の親戚がいるなんて聞いたことないのよねえ……」

舞さんは、俺に疑うような目を向けた。

どうも俺は、この舞さんという女性が苦手だ。

俺の母さんに似た雰囲気があつて、何もかも見透かされそうな感じがするのだ。

下手にしゃべると、ボロが出そうなので、俺は「大人の人たちの会話の意味が分からなくて、おどおどしている子供」の演技をすることにした。

舞さんの蘭への質問は続いた。

「蘭ちゃん。コナンくんのご両親に会ったことはあるの?」

「お父さんに会ったことはありませんけど、お母さんに会ったことは一度あります。『文代』という名前の人でした」

「新一さんとコナンくんが、同じ場所に同時に一緒にいるのを見たことはあるの?」

「はい、一度。私の通っている高校の演劇で」

「ふーん」

舞さんは考え込んだ。

「あ、あの、舞さん……」

「なあに? 涼ちゃん」

涼が少しおどおどした感じで、舞さんに近づいた。

「取りあえず。コナンくんのこととは後にして、撮影に入りませんか? 少しスケジュールが遅れてますし……」

舞さんは涼の顔を見てニツコリと笑った後、俺の顔を見た。

何だろう? 舞さんの笑顔そのものは綺麗なのに、何だか不吉な感じがする。

「そうね。お仕事優先ね。ちょっと、待ってね。準備してくるから」

僕の名前は「秋月涼」。れっきとした男だけど、女性アイドルやっています。

驚いた。舞さんと新一先輩に面識があつたなんて……。

普通、常識的に考えれば小学生一年生の「江戸川コナン」と高校生の「工藤新一」をいくらソックリだからといって、同一人物だとは思わないだろう。

だけでも、舞さんには「常識」は通用しない。

以前、僕が愛ちゃんの家にお邪魔した時に、舞さんとは初めて会った。

そこで、舞さんが僕の正体が、「男」だと見破っていることを知った時は驚いた。

自慢では無いが、僕は今トップアイドルとして、大勢のファン、一緒に仕事をしている芸能人、スタッフの視線にさらされている。

その中の一人でも、僕が「男」だと見破ったのならば、とつくの昔に大騒ぎになっているはずだ。

つまり、僕の「女性アイドル」としての振る舞いは、それほど完璧だということだ。

なのに、舞さんは見破った。

あらゆる意味で、舞さんは常識を越えた人だと言える。

あのまま、舞さんが蘭さんとの会話を進めていると、舞さんがみんなの前で新一先輩の正体を暴いてしまいそうなので僕は止めたが、僕は舞さん個人が知るだけなら大丈夫だと思っている。

なぜなら、舞さんは娘の愛ちゃんにも僕が「男」だということを話してはいない。

人の知られたくない秘密を言い触らすような人ではないと、舞さんのことは信頼できる。

後で、新一先輩と相談して舞さんへの対応は決めることにしよう。

僕が頭の片隅で、そんなことを考えながら、ドラマの撮影は進んだ。

「へーっ！『涼太さん』は男の人なんですか？女装して『涼さん』と入れ替わっていたなんて、全然気がつきませんでした」

愛ちゃんが、僕の顔をまじまじと見た。

これは、ドラマの中での愛ちゃんのセリフだ。

ドラマの中での毛利探偵事務所のアルバイトの助手である男子高校

生「秋月涼太」が女装して、女性アイドル「秋月涼」と入れ替わっていたことが、「秋月涼」と親しい女性アイドルたちにはれて、理由を説明するために876プロにみんな集まっている設定になっている。

「でも、本当にソックリ？こうして並んでいるのを見ると、双子の姉妹にしか見えない？」

これは、絵里ちゃんのセリフだ。

僕は今、Tシャツにジーンズにメガネの男子高校生「秋月涼太」を演じている。

すぐ隣には、女性アイドル「秋月涼」がいるという設定だ。

もちろん。「女性アイドル秋月涼」は後から別に撮影して、合成することになっている。

「酷いですよ！水谷さん。『双子の姉妹』だなんて！『双子の兄妹』が『双子の姉弟』って言うてください！僕は今ちゃんと男の格好しているんですから！」

僕のセリフに対して、絵里ちゃんが笑った。

「でも、男の格好している『涼太さん』、女の『涼さん』が男装しているようにしか、見えない？」

「酷い！酷いですよ！水谷さん！」

「酷いのは、どっちよ！涼太くん！」

尾崎さんが激しい怒りの形相で、僕と絵里ちゃんの間に割り込んだ。

「この前、絵里と秋月さん一緒に仕事したわよね？あの時の秋月さんは、『涼さん』と『涼太くん』どっちだったの？」

「あ、あの……、僕の方です」

僕、「秋月涼太」は右手をおそろおそろ拳げた。

尾崎さんは右手を高々と振り上げると、僕の頬に向けて平手打ちをした。

僕は黙ってこれを受けて、微動だにしなかった。

「どうして避けようと、しなかったの！？」

「僕は尾崎さんが怒っている理由が、分かっているつもりです。あの時、水谷さんと共同で女子更衣室使いました。『男』の僕が……」

ますます尾崎さんの怒りの形相が、凄くなった。

「そうよ。涼太くん！女同士だと思われているのを、いいことに、絵里の下着姿を見るなんて！」

僕は演技ではなく本当に罪悪感で、尾崎さんの顔をまともに見ることができなくて、うつむいた。

尾崎さんは、僕が現実に「男」だと知らないから、あくまでドラマの台本通りに僕を責めているだけだと分かっている。

でも、あれだけ絵里ちゃんの大切にしている尾崎さんが僕の正体を知ったら、怒りの激しさはもっと凄い物になるだらう。

次の尾崎さんのセリフは、僕をさらに罵る物になっている。

罪悪感で押しつぶされないように、覚悟を決めなきゃ……。

「私も絵里の下着姿見たかったのに！」

あれ？……、尾崎さん台本と全然違うセリフを言ったぞ？

「私も絵里と一緒に更衣室で着替えたいのに！私はプロデューサーだから！着替える必要が無いから！絵里と一緒に更衣室に入ると不自然だから！できないのに！」

尾崎さん。完全に台本と違うセリフを言っている。

アドリブで飛ばす気なんだろうか？

僕は尾崎さんのアドリブに戸惑ったが、監督さんの「カット」の声が掛からないから、このまま撮影は続くらしい。

よしっ！僕もプロだ！尾崎さんの熱演にふさわしい演技をしよう！

S T A G E ・ 1 6 芸能事務所 876 プロにて その 2（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・17 芸能事務所876プロにて その3

私の名前は、「桜井夢子」。

今は芸能事務所876プロで、ドラマ「アイドル探偵 秋月涼」の撮影中だ。

尾崎プロデューサーのアドリブによる熱演は続いている。

台本では、尾崎プロデューサーは少し「秋月涼太」に抗議するだけで出番は終わりだったのだが、尾崎プロデューサーはアドリブで飛ばしている。

しかも、セリフの内容が尾崎プロデューサーが水谷絵里に「恋愛感情」を持っているかのようなだった。

もちろん。私は、尾崎プロデューサーが理性的な大人の女性だと知っているから、それが「演技」だと分かる。

この場面がテレビで放映されたとしても視聴者は、「脚色」だと思っ
って「事実」だとは思わないだろう。

「この変態！センプイの下着姿を見るなんて！アタシもまだなのに
！」

サイネリアさんも、「秋月涼太」への抗議にアドリブで参加している。

彼女の演技も尾崎プロデューサーと同じく、水谷絵里に「恋愛感情」

を持っているかのようにだった。

二人のセリフを聞いていると、まるで絵里さん、尾崎プロデューサー、サイネリアさんの三人が「恋の三角関係」のようでおかしかった。

もちろん。そんなことがあるわけがない。おそらく三人は事前に打ち合わせて、このアドリブをしているのだろう。

絵里さんが顔を赤くしてオロオロしている演技も見事だった。

「どんなに謝っても、僕のやったことは許されることはありませんが、お詫びに何でもやります！」

これは、「秋月涼太」のアドリブのセリフだ。

「何でもやるデスカ？ そうですネエ……」

サイネリアさんが思案顔になった。

「そうだ！ アンタ、今日一日メイド服を着て、メイドになってアタシたちにご奉仕しなさい！ それで許すことにしましょう！ どうデスカ？ センパイ？ ロン毛？」

絵里さんはニツコリと笑って、うなづいた。

「うん。それで許す？ 涼太くんのメイド姿見てみたい？」

尾崎プロデューサーは、いまいち納得していない顔をしているが、うなづいた。

「絵里が、それで良いと言うならば、私も納得するわ？でも、涼太くん。メイドになって、私たちに奉仕するなんて屈辱的なことに耐えられるのかしら？」

「分かりました。それで許してもらえるなら、メイドにでも何でもなります！」

「涼太」はキリツとした表情になった。

「よしっ！カット！OKだ！」

監督さんから声が掛かった。

監督さんは上機嫌なようで、ニコニコと笑っている。

「良いよ！尾崎プロデューサー。台本無視のアドリブだけど、この方が面白い」

そして、監督さんは撮影スタッフに指示を出した。

「おい！この後の場面を変更だ。涼ちゃんに似合うメイド服を、すぐに用意しろ！」

撮影スタッフさんたちは少し困惑しているようだった。

無理もない。今日の撮影では涼がメイド服を着る予定は無かったのだから、今からすぐに用意しろと言われても難しいだろう。

「ハーイ！ハーイ！それなら、私に任せて！」

日高舞さんが子供のように手を高く挙げた。

「まなみん。持って来ていた『あれ』出して！」

舞さんから「まなみん」と呼ばれた女性は、舞さんのマネージャーの「岡本まさみ」さんだ。

まなみさんは以前は８７６プロに勤めていて、涼と愛さんのマネージャーをしていたこともある。

「えっ！？舞さん。『あれ』って本気だったんですか？」

「もちろん。本気よ。私は『無茶なことをする』ことはあっても、『嘘をつく』ことは無いでしょ？」

その舞さんの言葉に、舞さんを除いた全員の声無き声が聞こえた。

（舞さん。無茶なことをやってるって、自覚あったんだ）

舞さんが色々は無茶苦茶なことをしているのは、芸能界では有名だ。

約束はすっぱかすし、あちこちでワガママ放題やっている。

一歩間違えれば、芸能生命を失いかねない刑事事件レベルの事をしたこともあるらしいが、その人気と実力でいつの間にか有耶無耶になっている。

一緒に仕事をした芸能人やスタッフは、みんな被害を受けている。

でも何故か、舞さんを嫌うような声は聞いたことは無い。

涼と同じで、舞さんも「人から好かれる」才能の持ち主なのだろう。もちろん。私は一緒に仕事をするなら、涼の方が遥かに安心できる。

まなみさんは、荷物から何かを取り出した。

それはメイド服だった。

「涼ちゃん。まなみさんからサイズは聞いてるから、ピッタリ合うはずよ!」

「舞さん!何で?メイド服なんか、持って来てるんですか?」

「だって、涼ちゃんのメイド姿見たかったんだもの。休憩時間にも頼んで着てもらうつもりだったけど、頼む手間はぶけたわね」

「でも、メイド姿になるなんて……」

「あら?さっきは、了承してたじゃない?」

「あれは……、尾崎さんたちのアドリブに引きずられて……」

「涼太くん!」

舞さんは少し怒ったような、そして少しイタズラっぽい表情になって涼を役名で呼んだ。

「涼太くんは男の子のくせに、女装して愛と一緒に更衣室使ったこ

とあるのよね？」

「はい……」

涼は撮影中と同じく、罪悪感でうつむいた。

涼はまだ「男子高校生の秋月涼太」の役から抜け切れていないのだろうか？

「私の大事な一人娘の愛に、そんな事をしたのよ？本来ならば訴えられるレベルなのよ？それをメイド姿になるだけで許すと言っているのだから、私の心の広さに感謝すべきじゃない？」

「はい、分かりました」

涼はメイド服を受け取ると、更衣室に向かった。

何故か舞さんは、涼のすぐ後ろを付いて行っただ。

「舞さん。何で？僕と一緒に更衣室に入ろうとするんですか？」

「そのメイド服は、特殊な作りをしていて一人じゃ着れないのよ。私が手伝ってあげるわ」

いけない！涼は今は「男の体」になっているんだっただ。

舞さんに着替えを手伝われたら、涼が「男の体」だとバレてしまう！

「舞さん。涼の着替えの手伝いなら、私がします！」

私は、涼と舞さんの間に割り込んだ。

「桜井夢子ちゃん……だったわね？私は涼ちゃんがメイド服に着替えるのを手伝うのが楽しみで、ここに来たのよ？その楽しみを奪うつもりなの？」

舞さんの声も表情も表面上は穏やかだったが、少し不機嫌にさせてしまったようで、私は怖かった。

舞さんは芸能界の大物だ。怒らせてしまったら、私は仕事を干される……、うつん。それどころか、芸能界そのものに居られなくなるかもしれない。

でも、涼が「男の体」になってしまったのは、私のせいなのだ。

何としても涼のその秘密は守らなきゃ！

「とにかく！涼の着替えは、私が手伝わなきゃ、ならないんです！」

「ふーん」

舞さんは興味深そうに、私の顔を見つめた後、涼に声をかけた。

「涼ちゃん。夢子ちゃんは、あなたにとって何なの？」

涼はハッキリとした口調で答えた。

「僕の『親友』であり『ライバル』でもあります」

私は涼のその言葉が、とても嬉しかった。

舞さんは面白そうな顔をして、涼と私を交互に見た。

「まあ、良いわ。ここは若い二人に任せるべきかしらね」

私と涼が更衣室に入ると、私は内側から鍵を掛けた。

この事務所に、隠しカメラや盗聴器が無いことは、コナンくんから渡された探知機で確かめてある。

「あの……、夢子ちゃん？」

「何？涼」

「舞さんを怒らせてしまうかもしれないのに、どうして、僕の着替えを手伝うことにしたの？」

「当たり前じゃない。今、涼は『男の体』なんだから」

涼はイマイチ腑に落ちないという顔になった。

「僕が『男の体』だと、何で舞さんが僕の着替えを手伝うのが駄目で、夢子ちゃんが手伝うことになるの？」

「当たり前じゃない。舞さんに涼が『男の体』だと知られたら、大騒ぎになっちゃうでしょ？」

「大騒ぎに、何で……、あーっ！あーっ！」

涼はようやく気づいたようだった。

「そうだよ。舞さんに僕が『男の体』だって知られたら大変だよ
ね！」

涼は何かを誤魔化すような笑顔になった。

「じゃあ、涼。全部服を脱いで」

「えっ！全部って！」

私は舞さんから手渡されたメモを見ながら答えた。

「このメイド服、裸にならないと着れないようになってるのよ。
下着も含めたセットになっていて、見せブラ、見せパンになってい
るのよ」

「舞さん。僕に何て物を着せるんだ……」

そう言いながら、涼は服を脱ぎ始めた。

涼はメガネをはずすと、Ｔシャツを脱いだ。

Ｔシャツを脱ぐと、涼は上半身裸だった。

「ちょっと！涼！」

私は外に聞こえないように大声は出さなかったが、鋭い声を出した。

「あなた！今日はブラジャー付けて来なかったの？」

今日は涼の家を出る時から、涼は「秋月涼太」の格好をしていた。

男物のTシャツにジーンズを着ていたが、下着は当然女性用の物を着ていると、私は思っていたのだ。

「えっ！？だって、僕には必要ないし……」

確かに「男の体」になっている涼にはブラジャーは必要ないし、今日は「秋月涼太」としての撮影予定しかないから、ブラジャーを付ける必要はないけど……。

それにしても……、まさか！

私は涼のジーンズを下ろした。

「ちょっと！ちょっと！夢子ちゃん！」

「やっぱり！」

涼がはいていたのは、男物のトランクスだった。

「涼！役作りに熱心なのは良いけど！男物の下着を着るのは、やり過ぎよ！」

涼は、私の言葉に戸惑っているようだった。

「涼は今は『男の体』なんだから、行動は『女の子』でいないと、心まで『男の子』になっちゃう危険があるわ！」

涼は納得した顔になって、つぶやいた。

「そうか、夢子ちゃんの立場から見ると、そう判断しちゃうのか…」

涼のつぶやきの意味は分からなかったが、私は涼のトランクスに手を掛けた。

「さあ！こんな脱いで！そうじゃないと、自分が本当は『男』なのか『女』なのか、分からなくなるわよ！」

「ぎゃおおおん！もう、僕が『男』か『女』か、自分でも分からなくなってるよ！」

「涼！撮影の時以外は『僕』って言っちゃ、ダメ！涼は『女の子』なんだから、ちゃんと『私』と言いなさい！」

「男の体」になっている涼の着替えを手伝うのは、ハッキリ言って恥ずかしかったが、私はその気持ちを表に出さないようにした。

涼が「男の体」になったのは、私に責任があるのだから、私は涼がどうなっていようと、涼を『女の子』と扱う義務がある。

涼がメイド服に着替えたのは、この後起きる騒動の始まりだったと、私は後から気づくことになる。

S T A G E ・ 1 7 芸能事務所 876 プロにて その 3（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

STAGE・18 芸能事務所876プロにて その4

私の名前は「宮野志保」。今は表向きは「灰原哀」を名乗っている。
ドラマの撮影が再開された。

秋月さんはメイド姿になって、日高舞さんにお茶やお菓子の給仕をしているシーンを撮影している。

秋月さんのメイド姿は、本当は男の子だと知っている私の目から見ても可愛い。

「本当に男の子なの？涼太くん。とても、そうは見えないわね？」

「ま、舞さん。そんな所に手を入れないで……」

日高舞さんは嬉しそうに、秋月さんの胸やスカートに手を突っ込んでいる。

このシーンは元々台本に無かったので、完全なアドリブだそうだ。

吉田さんは夢中になってドラマの撮影を見ている。

以外だったのは、工藤くんもメイド姿の秋月さんの姿を目で追っていたことだ。

だから私はドラマの撮影が中断して休憩時間になると、工藤くんにこう言っちゃった。

「あなたが、女装した男の子が好みとは知らなかったわね。大丈夫よ。あなたがどういう趣味でも、私は気にしないから」

もちろん。他の人には聞こえないように私は小声で言った。

「なっ！？からかうなよ。灰原！」

工藤くんは顔を赤くした。

「確かに、涼のメイド姿は可愛いけどさ……」

私は少し笑って、工藤くんをからかうのを続けた。

「大丈夫よ。今の世の中は同性愛への偏見もだいぶ減ったんだし、自分の気持ちに正直になりなさい」

「そういう意味で、涼のメイド姿を見ていたんじゃない！」

「じゃあ？どういう意味なの？」

工藤くんは言いにくそうにしていたが、声をひそめて言った。

「その……、蘭がメイド姿になった場合を想像していたんだ」

私はその言葉にショックを受けた。

そう。工藤くんは、幼なじみの毛利蘭さんのことをいつも思っている。

「メイド姿を見たい」というのは、少し変態みたいだけど、それは

蘭さんのことを「女」扱いしているということだ。

私は結局工藤くんからは、「女」扱いされていないと分かるからだ。そう思うと少し寂しくなった。

でも私の口から出たのは、相変わらず工藤くんをからかう言葉だった。

「秋月さんの着ているメイド服は、かなり大胆なデザインよ。それを蘭さんに着せたいなんて、工藤くんはかなりのエッチさんなのね？」

「うるへー、頭の中で想像するだけなら自由だろ？」

そう言った工藤くんに、私は何か言い返そうとしたが、その前に別の声が割り込んで来た。

「二人とも、何をこそこそ話しているの？」

不機嫌な顔をしている吉田さんだった。

「江戸川コナン」に恋をしている吉田さんは、私と工藤くんが二人きりで話をしていると、嫉妬してしまうことが多い。

だから、私は吉田さんを安心させようと、こう言った。

「江戸川くんが、メイド好きだって話していたのよ」

吉田さんの表情が、パツと明るくなった。

「コナンくん。そういう趣味があるのなら、言ってくれば良かったのに！」

そう言つて、吉田さんは何故か日高舞さんに近づいた。

「舞おばさん。お願いしたいことがあるの」

吉田さんは無邪気な声で日高舞さんに話し掛けた。

「おばさん、って私のこと？」

日高舞さんが少し怒りを含んだ声になった。

部屋の中にいるドラマの出演者やスタッフたちの空気が緊張した。

その空気に気づくことなく、吉田さんは話し続けた。

「うん、そうだよ。舞おばさん」

日高舞さんは苦笑した。

「確かに十三歳の娘がいる私が、小学一年生から『おばさん』って呼ばれるのは仕方ないわね。それで、お願いって何なのかしら？」

吉田さんのお願いの結果、私は吉田さんと一緒にみんなにコーヒーを入れるハメになっている。

「あっ！？吉田さん！江戸川くんのコーヒーには砂糖を入れないで！彼はブラックが好みだから」

「哀ちゃん。やっぱり、コナンくんのことよく分かっているんだね。でも、歩美、負けないからね」

吉田さんはコーヒーを、私はお茶菓子としてのクッキーをみんなに配った。

工藤くんの前で吉田さんは、昔は一部の特殊な趣味の人たちの間だけで有名で、今では一般にも広まった定番のあのセリフを言った。

「お待たせしました！ご主人さま！」

工藤くんは顔を少し赤くしながら、吉田さんからコーヒーを受け取った。

「あ、ありがとう……、歩美ちゃん」

吉田さんは工藤くんの隣に座った。

「ねえ？歩美のこの格好可愛い？」

「う、うん。可愛いよ。歩美ちゃん」

「本当？嬉しい！」

そう吉田さんはメイド服を着ている。

吉田さんが日高舞さんにしたお願いは、「小さな子供用のメイド服を用意して欲しい」ということだった。

日高舞さんはマネージャーとスタッフを駆けずり回せて、子供用のメイド服を用意した。

そして、私の分までメイド服は用意されたのだ。

私は着るのを断ったんだけど、舞さんの「あら？マネージャーとスタッフの努力を無駄にするわけ？」と、吉田さんの「哀ちゃんとは同じ条件で勝負したいの」という言葉に、ムリヤリ着ることになった。

自分でも分かる不機嫌な表情で、工藤くんの前にクッキーの皿を無言で少し乱暴に置いた。

工藤くんは少し驚いたように目を見開いた。

「何？江戸川くん。私にも『ご主人さま』って言って欲しかったわけ？」

工藤くんは軽く首を横に振って答えた。

「いや、灰原って、そういう可愛い服もやっぱり似合うんだなって思ったんだ」

「なっ!？」

私は工藤くんに心理的に不意を突かれた感じで、自分の顔が赤くなっ

た。
「別に私のこと誉めたって、何も出ないわよ！」

私がそう言つと、サイネリアさんが近づいて来た。

「フーム。シヨタメガネ。こちらのカチューシャと茶髪とは、どう
いう関係なのデスカ？」

「シヨタメガネ」が工藤くん。「カチューシャ」が吉田さん。「茶
髪」が私のことだろう。

「僕の同級生だよ」

工藤くんの答えを聞いて、サイネリアさんはニヤニヤと笑みを浮か
べた。

「同級生の美少女二人をはべらすとは、シヨタメガネ、なかなかや
りますネ」

私はサイネリアさんのその言葉を慌てて否定した。

「サイネリアさん！吉田さんはともかく！私は工藤くんに好意なん
て持ってないわ！」

サイネリアさんはニヤニヤ笑いを大きくしただけだった。

「その歳で『ツンデレ』とは、やりますネ」

私も「ツンデレ」という言葉の意味ぐらいは知っている。

「私は『ツン』でも『デレ』でもありません！」

「まあ、まあ、灰原さん。そんなに興奮しないで」

桜井さんが会話に加わった。

「灰原さん。昨日も言ったけど、自分の気持ちには正直になった方が良いわよ。昨日、私と涼がコナンくんと一緒に風呂に入ったことに、あんなに嫉妬してたじゃない」

桜井さんの発言に、吉田さんは激しく反応した。

「コナンくん！蘭お姉さんだけじゃなくて！秋月お姉さんや桜井お姉さんまで、手を出しているなんて！年上の女の人が好きなのは知っていたけど！」

吉田さんがコナンくんに迫るのを、サイネリアさんはニヤニヤと笑って見ていた。

「シヨタメガネ。自分が小学一年生であることを利用して、年上のお姉さんにまで手を出すとは、アナタが高校生だったら『ハーレムエンド狙いか！』『リア充爆発しろ！』と言ってやりたいところですね」

「サイネリアお姉さん。『ハーレムエンド』って何ですか？」

「それはですネ。一人の男性が複数の女性を……」

吉田さんの質問に答えるサイネリアさんに、私は慌てて止めた。

「止めて！サイネリアさん！子供の教育に悪いでしょ！」

「アナタも子供ですけどネ。『ハーレムエンド』の意味が、その歳

で分かるとは侮れせんネ」

そして、サイネリアさんは、私と工藤くん、そして吉田さんの順に見た。

「いつそのこと、茶髪とカチューシャは、シヨタメガネに『妻妾同居』したらどうですカ？まあ、どっちが妻になるかが問題ですガ」

「妻妾同居」の意味が分かる私は恥ずかしさで、顔が赤くなった。

「『さいしょーどうきょ』って何ですか？」

「それはデスネ……」

無邪気な吉田さんに、サイネリアさんが答えようとした。

「ダメだよ！サイネリアお姉さん！歩美ちゃんは子供なんだから！そんなこと教えちゃ！」

今度は工藤くんが、サイネリアさんを止めた。

「それでは、シヨタメガネ。誰が妻で、誰を妾にしたいんですカ？」

「僕が愛している女性は一人だけだよ！」

そう言つて工藤くんは、無意識にだろぅが蘭さんに目を向けた。

「あーっ！コナンくん！やっぱり！蘭お姉さんのことが一番好きなんだー！」

今度は、吉田さんが工藤くんに迫った。

「コナンくん。蘭お姉さんさんには『工藤新一』って有名な高校生探偵の恋人がいるんだから、コナンがどんなに蘭お姉さんのことを好きでも無駄なんだから！」

そう、「工藤新一」は「毛利蘭」のことを世界で一番愛している。

工藤くんから見れば、吉田さんは「年の離れた妹」のようなものだろうし、私はせいぜい「探偵としての相棒」止まりだろう。

「サイネリアさん。調子に乗りすぎですよ。歩美ちゃんも、これから私がこれから話すことをよく聞いてね」

秋月さんがしゃがんで吉田さんと、同じ目線になって話し始めた。

「私は学校の同性のお友達や先輩から『好きだ！』『付き合ってくれ！』『結婚してくれ！』ってよく言われるの」

「えっ！？涼お姉さんの学校って、女子校なの？」

秋月さんは苦笑した。

「うっん、共学よ。私は同性とお付き合いする気は無かったから、全部断ったんだけど、その人たちが異性だったとしても断ったと思うわ」

「どうして？涼お姉さん」

「その人たちは自分の『好きだ』という気持ちを私に一方的にぶつ

けるだけで、私自身の気持ちを考えてはくれなかったからよ。歩美ちゃんもコナンくんのが好きなら、コナンくんの気持ちも考えなければならぬわよ」

「うん、分かった。涼お姉さん」

秋月さんは悪戯っぽい表情になった。

「なーんて、偉そうなこと言ってるけど、私にはちゃんとした恋愛経験無いんだけどね」

騒ぎは一応収まり、ドラマの撮影が再開された。

工藤くんはポケットから携帯ゲーム機を取り出した。

知らない人から見れば、工藤くんが撮影見学に飽きて、ゲームをしようとしているようにしか見えないだろうが、実際には今日も桜井さんを尾行して来ている車に工藤くんが取り付けた盗聴器と発信機をモニターしようとしているのだ。

ゲーム機のディスプレイをみた途端に工藤くんは、撮影中なので声には出さなかったが、ひどく驚いた顔になった。

S T A G E ・ 1 8 芸能事務所 876 プロにて その 4（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8640o/>

アイドル探偵 秋月涼 名探偵コナン&アイドルマスターDS 秋月涼

2011年11月12日10時49分発行